

埋納土器についての考察

小此木 良子

報告書概要

研究テーマ：埋納土器についての考察

－埋納土器は運搬容器であったのか－

唐古・鍵遺跡の出土品「褐鉄鉾容器とヒスイ勾玉」を見て埋甕を連想したことから、縄文時代にヒスイなどの器物を収納した土器が出土しているかどうかを調べてみようと思った。器物収納の土器に関してはまだ定まった名前がなかったなので、本論ではそれを埋納土器と呼ぶことにした。

調査する地域は北海道を除く東日本とし、収集資料を分析して使用された土器と収蔵品との関連、また埋納土器が運搬用の容器として機能していたかどうかを考察した。

その結果、埋納土器は縄文中期中葉から晩期初頭まで 1000 年以上もの長きにわたって見られること、「装飾品を納める宝石箱的な使われ方」という予想に反しヒスイ製品の収納はわずか一例で、ほとんどが磨製石斧や黒曜石などの実用品であったことなどが判明した。

継続期間が長かったためか、使われた土器の形状は時代により異なっており、持ち運び用と考えられた把手付きの土器もある時期にしか見られず、土器の大きさと遺物収蔵数との関連性、また有事に掘り出して持ち運んだ、運搬容器としての共通性は見えてこなかった。

目次

はじめに	1
第1章 埋甕と埋納（デポ）	
1. 埋甕とは	2
2. 埋甕に使われた土器と埋設時期	3
3. 埋納の概念・デポの定義	4
4. 埋納土器	5
第2章 各地の出土例	
1. 関東地方	6
2. 甲信越地方	9
3. 東北地方	11
第3章 収集資料の分析	
1. 出現時期	14
2. 出土状況	14
3. 埋納品	15
第4章 埋納に使われた土器	
1. 注口土器	16
2. 土器の大きさと石斧の数	17
3. 土器は運搬容器であったのか	18
おわりに	20
注	21
参考文献	27
資料集	
A表（器物収納資料）	32
B表（原材料収納資料）	39
C表（土器編年表）	43
D表（石斧サイズ表）	44
写真版	46
図版 1-1、1-2、1-3、2-1、2-2	57
遺物収納土器出土遺跡地図	62

はじめに

楼閣が描かれた絵画土器(写真1、2)が出土し有名になった唐子・鍵遺跡(注1)ミュージアムで、「ヒスイ勾玉を納めた褐鉄鉦容器」(注2、写真3)を見た。鉢形をした中空の褐鉄鉦石(注3)内部に、ヒスイの勾玉(注4、5)二点が納められた遺物で、その形状は縄文時代の埋甕を連想(注6)させた。他にも同様の出土例はあるのだろうかという興味を覚え、遺物が収納された土器の事例を調べてみることにした。

本論でテーマとしたのは、縄文時代中期から晩期にかけて稀に見られる遺構で、石斧や大珠や黒曜石など遺物が入った状態で出土する土器のことである。土中に埋められていたり、住居址に置かれたりという出土状況は様々である。長野県宮崎遺跡の黒曜石収納土器、千葉県古作貝塚の貝輸入り蓋付き土器、小型石斧が入っていた東京都桜塚遺跡の注口土器などが知られている。

埋納土器は「意識的に遺物を埋め納める」を意味する「埋納」からの派生語であるが、まだ言葉として確立しているわけではなく、もちろん定義づけもされていない。そのため、内容物が検出されないため幼児墓の可能性が高いとされる埋甕や、単に「形を保ったまま埋められた土器」を指す言葉としても用いられている。埋設土器と言う語が、同義語として用いられる場合もある。

調査報告書には「石斧が収納された土器」「黒曜石格納土器」等、遺物による書き分けがされているが、その表現は報告者に任せられ、内容物の種別をこえて全体を網羅し、埋甕と区別できる専門用語がないのが実情である。「遺物が土器に収納された状態で出土した遺構」を指す適切な用語が見当たらなかったため、本論では「埋納土器」をそれにあたる言葉として用いることにする。

埋納とは、ヨーロッパ先史考古学を研究した佐原氏が「意識的に遺物を埋め納めること、その遺跡、遺物」(佐原 1985)の内容を含む、デポの訳語として提示した言葉である。しかしながら、「納」め「埋」めると言う語から成る埋納では墓への副葬品を含む恐れもあると、現在ではデポの語がそのまま用いられることが多い。デポは「収蔵・隠匿・供献の3つの要素から成る」(田中 1995)とされ、遺物が土器に収蔵された事例は「隠蔽」のデポに分類されている。

埋納土器についての先行研究は埋甕かデポの一種としての取り扱いであり、単独で取り上げられたものは少ない。分野が確立していないため、発掘現場でも見落とされることがあると言う。そのためもあってか出土例が少なく、時代に隔たりがある遺物も一括りに論じられてきたのが現状である。

本論では容器である土器に着目し、年代順に分類整理することにより全体像を掴もうと試みた。時代によって土器の傾向に変化があるのか、内容物と土器とはどう関わっていたのか、この二点を中心に考察した。埋納土器の存在を知ってもらうことで報告例が増え、研究が活発になることを期待するものである。

資料は、物を土器に入れて埋めた、物を土器に入れ置いた、物を置き土器を被せた等、土器と遺物との関連が見られる出土例を取り上げることとし、墓への副葬品は除いてある。対象としたのは北海道を除く東日本、関東甲信越と東北地方の縄文時代の遺構である。

第1章 埋甕と埋納（デポ）

1. 埋甕とは

縄文時代の住居址から、埋められた土器が検出されることがある。埋甕と呼ばれる遺構(写真 4)で、正位か逆位(注 7)の垂直状態で埋められている。正位の場合は、石蓋を伴う場合がある。用途については食料貯蔵容器説、幼児の甕棺説、胎盤収納容器説、建築儀礼用装置説など諸説ある。

最初に埋甕について述べるのは、「土中に埋めてある土器」という埋納土器との共通性のためである。遺跡調査報告書の中でも明瞭な区別がされていない場合が多く、後学者の混乱のもとにもなっている。本論で使う用語を統一させる意味でも埋甕の性質を知る必要があり、先行研究を整理しておくにする。

埋甕とは文字通り「埋められた甕」を指す言葉である。1950年に八ヶ岳の与助尾根を発掘調査した宮坂英弼(注 8)氏がその報告書(注 9)の中で(宮坂 1950)、竪穴式住居址の床面下に埋設されていた土器を埋甕と称して以来、この言葉が一般的に使われるようになった。

出土資料数も増えた 1960 年代になると、埋甕は何のために設けられたのか、という用途論が活発になる。猪越公子氏のまとめた埋甕研究史(猪越 1973)によると、宮坂光昭氏の貯蔵容器説(宮坂 1965)、桐原健氏の胎盤収納説(桐原 1967)、渡辺誠氏の幼児甕棺説(渡辺 1968)などが次々と発表されている。桐原氏が「住居址の床面に人為的に埋められていて、口縁部ないし底部が床面と同じレベルにある土器を指し、火壺として使用されているものは埋設炉(注 10)として区別する」と埋甕を定義したのもこの時期である。

埋甕は「出産時の胎盤を収納して住居の入り口付近に埋めたもの」(木下 1970)という埋甕胞衣壺説を唱えたのは木下忠氏であった。長野県伊那地方の埋甕に限定してだが田中清文氏は、「唐草文系土器群(注 11)は、胎盤収納及び幼児埋葬としての甕棺」(田中 1984)と唐草文様の土器は出産に関わる特別な容器、との認識を示している。

このように様々な用途論が出てくるのは、埋甕の中から内容物が検出されないからである。「たとえ何かを入れていたとしても、腐朽したり酸化したりして全く痕跡をとどめない可能性が高い」(小林 2008)とされているように、ほ

とんどの場合、埋められた土器だけが出土している。幼児甕棺説は、千葉県松戸市殿平賀遺跡の甕の下から小児骨が検出されたことによる考察であった。しかしこの事例では甕が口縁部まで埋められた状態でなかったことから、根拠自体を疑問視する研究者もいる。状況証拠と考古学的物証、この両者が揃わないと用途の特定には至らないようである。

では埋甕をどう捉えたらよいのだろうか。桐原氏の埋甕の定義は「住居址の床面で」と住居址であることを前提条件としていたが、住居址外での埋甕の存在を示した猪越氏は「土坑や配石に埋設されている埋甕と住居址内に埋設されている埋甕と二分することが可能」（猪越 1973）と、埋甕を二種類に分類して検討することの重要性を述べている。埋甕を住居址内に限定せず、「土器を埋めることが意識され、土器の口縁、あるいは底部が生活面と同レベルである埋設土器を「埋甕」と称する」と言う猪越説には大いに賛意を表したい。

以上の先行研究から本論では埋甕を住居址内の遺構と限定せず、「人為的に埋められていて、口縁部又は底部が生活面レベルにあるもの。埋設炉は除く」として用い、用途の特定はしないものとする。

2. 埋甕に使われた土器と埋設時期

次に、使われていた土器の記述を見る。研究者によりそれぞれ「口縁は把手がなく平縁で、蓋をのせるのに便利で、キャリバー形(注12)が多く貯蔵用に適している」（桐原 1967）。「深鉢形土器」（渡辺 1968）。「深鉢がそれ用に当てられた」（小林 2008）と表現されている。これらの記述から、口縁部が平らで深さがある深鉢形土器が埋甕として選ばれていたことが判る。

埋められていた土器は完形とは限らず、口縁部を欠いたり、底部を欠損したりしているものも多い。住居址内の埋甕に完形品が少ないことを指摘した渡辺氏は埋甕幼児甕棺説の立場から「底部を欠くことが埋甕にとってかなり重要な意味があった。封じられた精霊の、母なる大地と母体との行き来を妨げないための配慮であろうか」（渡辺 1968）と述べている。

底部を欠く埋甕に対しては又、幼児埋葬説・胞衣壺説の立場から、安産や再生復活を願う呪術的な行為との見方がなされている。田中氏は「埋甕・伏甕などは「再生観念」を想起させ、原始農耕をも意識させる」（田中 1984）と、唐草文様は埋甕専用の施文であったとその土器の特殊性を述べている。

埋甕は縄文時代中期中葉に出現し、中部山岳地方から関東地方にかけ広く分布している。継続期間については「曾利1式(注13)から出現し、曾利5式期になると消滅する」（宮坂 1965）、「埋甕の出土する住居址は加曾利E式(注14)期が多い」（桐原 1967）、「埋甕の盛期は加曾利E式期である」（木下 1981）、「中期中葉に始まり後期初頭まで行われていた」（小林 2008）と、縄文中期中葉から後

期初頭にかけて埋甕が行われていたと指摘されている。

中部高地・神奈川・東京・千葉・埼玉の埋甕資料を集成した木下氏は、「各地域とも一様に縄文時代中期の終末には急激に集落の減少・衰減をきたしている」とし、埋甕の終焉は「内陸部に栄えた大集落が凋落する時期と一致する」（木下 1981）と結んでいる。

環境考古学研究の安田善憲氏による縄文後期の気候は、「3400 年前頃より寒冷化の傾向を示し、3000 年前頃には著しい寒冷期をむかえる」（安田 1995）というが、縄文後期の八ヶ岳山麓ではそれに呼応するように集落数が減少している。縄文時代の人口を見ると、最大人口を擁した中期は約 27 万人、寒冷化が始まった後期は 16 万人、晩期寒冷期と呼ばれる時期は約 8 万人と列島全体で人口が激減したという。縄文時代最盛期に初現を見る埋甕は寒冷期の訪れと、それに伴う人口減少の中で終焉をむかえたことになる。

3. 埋納の概念・デポの定義

研究者によって埋納の定義はどうかされているのか整理しておく。

佐原眞論： 佐原氏は「ヨーロッパ先史考古学における埋納（デポ）の概念」でデポという言葉をもつて、「意識的に埋め納めた状況下で、集落遺跡や墓以外で見出される遺物、およびその遺跡」（佐原 1985）という意味で用いるとしており、「再び取り出す意図をもつての隠匿・秘匿・埋蔵・収蔵行為と、永遠に放棄する意図を持って埋めたものも合わせ含む語」として「埋納」と言う言葉を提示している。本論で「埋納」と言う言葉を使う場合は佐原氏の定義に従うこととする。

ここで、同論文の資料編に収められた、2 人の考古学者の説を紹介しておこう。

19 世紀末のデンマークの考古学者ソフス・ミュラーは、「地中にゆだねるべき価値あるものは、通常、種類の違ったものから成っており」と述べ、単一種類の遺物から成る全てを「原始の状態においては、装身具や器具の類が一種の貨幣となる」と考えた。そこには、最も出土例の多かった石斧も含まれている。また、粗悪品や未完成品の供献を「宗教詐欺行為」と断ずるなど、興味深い論を展開している。

イギリスの考古学者ゴードン・チャイルド（1892－1957）は、「土中に一緒に埋めた道具や装身具・容器の集まり」である「埋納遺物（hoards）」は、「容器に納めてあることもある。時には布袋か皮袋の痕跡が見出されることもある」と、遺物を包んでいた有機物資料の存在を示唆している。

田中英司論： デポとは、「様々な目的のために設置されながらも使用・消費されるまでの間に猶予期間のおかれた、器物の残存現象」（田中 1995）と定義し、設置目的を「収蔵」・「隠匿」・「供献」と三分類した上で、石斧・大珠などを土器に収蔵した事例に関しては「隠蔽」のデポとして扱っている。

縄文時代の集落は移動を伴うものとして「希少品を集落内で保管するには収奪の危険性がある」と述べ、「デポは携帯可能な土器を用いることが多い」（田中 2000）と推察している。また、隠匿デポではあるが内容物が実用品であることを指摘し、「土器は所有者とともに携行される性格を持つ」（田中 2001）、「器物を収納し携行し得る専用容器」（田中 2007）と、埋納土器携帯容器説を提示している。

「デポの設置者は器物の所有者」とする視点からデポの可搬性に着目し、「デポ遺構は物の移動に伴って起こる現象」（田中 2001）であるとした。その結果生じる交換・交易現場での交換財として、「貝輪(注 15)・大珠(注 16)・定角式磨製石斧(注 17) はほぼ等価に扱われた希少品」との考察もある。

栗島義明論： 縄文時代草創期の石器集積を、「デポ遺跡は石器の動きの二つの側面（分配／交換）を静止状態で示している」（栗島義明 1990）としながらも、特殊な石器埋納に関しては「石器の分配・交換を目的としたものと様相を異にしたデポ。儀礼的な意味を持った石器群の埋納」と、前者を石器集積、後者を石器埋納と区別している。経済的色彩の強い集積と儀礼的要素の濃い埋納を同じものとして扱ってきた、それまでのデポ論に一石を投じる内容になっている。

縄文時代草創期の石器集積と、縄文中期～後期にかけて盛行した土器埋納を同列に扱うことはできないのかもしれないが、資料を集めて整理していく中で、一番近いと感じたのがこの栗島氏の説だった。

4. 埋納土器

「はじめに」でも触れたように、埋納土器は未確立の分野のため単独での研究は少ない。一つのジャンルとして埋納土器を取り上げてくれたのは、田中英司氏の「日本先史時代のデポ」（田中 1995）が最初だったように思う。その田中説以前の報告例や研究を紹介しておこう。

1928年、千葉県古作貝塚から出土した2点の貝輪(写真7)入り蓋付き土器が、「最近発見された貝輪入り蓋付土器」（八幡 1928）として紹介された。この土器は船橋競馬場建設工事中に発見されたもので、第1号土器には32点の、第2号土器には19点の貝輪が入っていた。飲食物煮沸用の土器に貝輪が入れてあったことに対して八幡氏は「極めて珍しい事質」と述べ、「貝輪を何らかの必要上貯蔵する風習があったものと」推察している。

1956年笹津備洋氏が、「小形石斧を収蔵せる注口土器の一例」（笹津 1956）として東京都八王子市桜塚で偶然発見された磨製石斧入り注口土器を報告している。磨製石斧は通常石斧には用いられない軟質の蛇灰岩製(注 18)であったため「宝物的な扱いをうけたものではないか」と推察している。

1957年、八ヶ岳西南山麓(写真5)の尖石遺跡と与助尾根(写真6)の発掘成果を集大

成した『尖石』(宮坂 1957)が出された。氏は、尖石遺跡第 1 号住居址で積石遺構の埋設土器中に「見事な磨石斧」が納められていたこと、与助尾根遺跡第 8 住居址の埋設壺形土器の内部から土偶の頭部が検出されたことに触れ、「当時貴重なものと思惟される資料を、各々蔵置してあった点に一致を見」、この装置を用いて何等かの呪術が行われていたのではないかと考察している。

1965 年、武蔵野市御殿山遺跡(注 19)出土の石斧収蔵土器が、武蔵野市史の中で紹介された。報告書の中で古作貝塚・桜塚遺跡・尖石遺跡・与助尾根遺跡の四つの事例をあげ「必ずしも諸例と同義とは言えないかもしれない」としながらも、縄文中期末葉か後期初頭と言う土器の共通性(注 20)から「これらの時期におけるかかる傾向について注意すべきであろう」と提示している。

また、「貯蔵用の土器の中から打製石斧 2 個と小形磨製石斧 1 個が検出されたことは、貯蔵用の品が必ずしも食料とか、貴重な器具に限らず、かかる什器類も包蔵した事実が知られ、当時の生活の一端を知るおもしろい資料といつてよいだろう」とも述べている。

1982 年に長野市の宮崎遺跡から、1948 年に敷石住居址の敷石の下から出土していた使用痕のない定角式磨製石斧 4 点が収納された鉢形土器の報告があった。使用痕が無い石斧が収納されていたことに報告者宮下氏は「特異な出土状態とも合わせ注目される資料」と考察している。

1988 年には青森県の笹子遺跡から、磨製石斧 3 点入りの壺型土器出土の報告がされている。報告書は、「この壺型土器内には大きさの違う磨製石斧 3 点を意図的に納めていた」と、特異な出土状況であったことを述べている。

それでは次に、各地の出土例を地域別に見ておこう。

第 2 章 各地の出土例

1. 関東地方

東京都八王子市桜塚遺跡： 都内の最も古い出土例。正式な調査ではなく、偶然見つかって研究者のところに持ち込まれている。「高さ 14.5cm、胴径 19.0cm、底径 6.0cm の土瓶状注口土器が単独で発見された。土器の内部には小形磨製石斧が 4 点収蔵されていた」(笹津 1956)。

石斧に使用痕はなく、素材は蛇灰岩製が 3 点と碧玉製が 1 点で、「蛇灰岩のごとき軟質の岩石は、(中略)石斧としての用途には使用し得ないと思われるものであり、(中略)宝物的な扱いを受けたものではないか」(笹津 1956)と推察している。周辺から「加曾利 E-4 式と堀之内 1 式の土器片」が見つかっており、出土の注口土器は堀ノ内 1 式期(注 21)に分類されている。

東京都武蔵野市御殿山遺跡： 1962 年に発掘調査が行われたこの遺跡では第 1

号住居址より、打製石斧 2 点と磨製石斧 1 点が入れられた埋設土器が発見されている。「完形土器が口縁部を床面に接してほぼ直立の状態で埋設されており、且つ中に石斧が検出された。(中略) 土器に接して 33x27cm、厚さ 8cm の扁平の大きな自然石が、あたかも蓋石のように置かれてあったのが注意される」(武蔵野市史 1965)。

土器の形状大きさは、「高さ 40.8cm、口径 31.5cm、底径 9.0cm、口辺が開き頸部において若干細くなり胴部がややふくれている」と報告されている。

東京都府中市武蔵台遺跡： この遺跡では住居址から 200～250m 離れた湧水地から、「6 点の磨製石斧が収蔵されている、加曾利 E-4 式の瓢箪型土器」(都立府中病院内遺跡調査会 1996) が発見された。この土器には「復元器高 11.5cm、底径 4.5cm の楕円状の口径を持つ土器」が「蓋のようにかぶさった状態」で出土している。瓢箪型の土器は、器高 27.0cm、口径 7.0～8.0cm、上半の最大胴径 14.0cm、下半の最大胴径 18.5cm、底径 6.0cm の大きさである。

磨製石斧の材質は、7cm 大 2 点は緑泥片岩製、12cm 大 2 点は結晶片岩類、13.7 と 15.5cm のものは硬質砂岩製であった。石斧の総重量は 1517.5g と 1.5kg ほどの重さがあった。全ての刃部には「使用で生じたと思われる刃こぼれが認められ(中略) 使用痕のなかった桜塚遺跡の出土例とは性質が違ふ可能性が高い」と報告されている。

神奈川県綾瀬市上土棚南遺跡(注 22)： 「第 5 次調査区北部の D-2 グリッド付近から磨製石斧 7 点を納めた土器も出土しており、これらは堀之内 2 式でも古い様相を示している」(綾瀬市教育委員会 2008) と報告されているが、出土状況、土器の大きさ、石斧の材質などの情報は記されていない。図から割り出した土器のおよその大きさは、残存高約 14cm、底径約 10cm。石斧は 2.6cm が 1 点、5.4cm～10.4cm が 5 点、最も大きな石斧は 11.0cm であった。

神奈川県愛甲郡宮ヶ瀬遺跡群 XVI 久保ノ坂 (No.4) 遺跡： 「埋納土器は 1 基検出され、後期堀之内式期に属する小型の朝顔形深鉢土器の中から、定角式磨製石斧が出土している。(中略) 器高約 20cm、口径約 17cm、底径 9cm の土器は正位の状態で埋設されていたが、掘り込みの確認はできなかった」(かながわ考古学財団 1998)。中に入れられていたのは定角式の磨製石斧 1 点で、「石材には硬質中粒凝灰岩が用いられている。(中略) 寸法は、長さ 8.3cm、幅 4.9cm、厚さ 2.1cm、重量は 161.9g である」。

神奈川県愛甲郡宮ヶ瀬遺跡群 VI 北原 (No.9) 遺跡： 「堀之内 1 式期に相当する土器は正位の状態で埋設されており、内部に黒曜石の残核・原石が 17 点納められていた。(中略) 口縁部には大型突起が見られるが先端部分を半分ほど欠損している」(神奈川県埋蔵文化財センター 1994)。

黒曜石は原石 9 点で計 286.6g、残核 8 点は計 275.6g で、出土総重量は 581.1g

となる。黒曜石は全て霧が峰産である。図から割り出した土器の大きさは、器高（突起部上部まで）約 28.6cm、口径約 19.0cm、胴部径 13.8cm、底径 6.6cm であった。当遺跡からは、石鏃未製品を含む黒曜石片が入っていた土器も出土している。

千葉県船橋市古作貝塚： こちらは、大量の貝輪が格納されていたことで有名になった古作貝塚の報告例である。調査時期は今回の資料中最古の 1928 年（昭和 3 年）で、中山競馬場設置のための発掘であった。「貝製腕輪の入った蓋付きの壺形土器 2 点が発見された。（中略）高さ 17.0cm の第 1 号土器には、ベンケイガイ(注 23)20 点・オオツタノハ(注 24)9 点・サルボウガイ(注 25)3 点の計 32 点、高さ 16.5cm の第 2 号土器には、ベンケイガイ 1 点、サルボウガイ 18 点の計 19 点が入っていた。（中略）土器は堀之内 I 式と鑑定される」（千葉県史 2000）。

埼玉県小鹿野町塚越向山遺跡(注 26、写真 9)： 埼玉県西部、群馬県との県境に近い山間部に当遺跡はある。三方の谷筋が合流して交通の一拠点となっていた場所であり、矢久峠を越えれば群馬県の万場町に至る。合角ダム建設に伴う土捨て場用地として、1990 年に発掘調査されている。

石斧と黒曜石が納められた注口土器(注 27)は、第 6 号敷石住居址の石囲い炉に置かれた状態(写真 8)で見ついている。「完形の加曾利 E-4 式注口土器の内下部に、定角式磨製石斧 10 点が粘土質の灰褐色土を充填して固定され、その上に黒曜石塊 3 点・黒曜石剥片及びチップ 14 点・チャート(注 28)剥片 3 点が収納されていた」（小鹿野町教育委員会 1991）。容器に用いられた注口土器は新しいものではなく、「口縁部が被熱により灰褐色に変化し、胴部上半には炭化物の付着が顕著」と、埋設以前に使用されていたことが確認されている。

下部に納められていた石斧は、「若干の使用痕が認められるが大きく欠損するほど用いられてはいない」状態のもので、総重量は 1,233g。その上に収納されていた黒曜石とチャート剥片の総重量は 1,026g で、合計 2,259g が量られている。

埼玉県川口市石神貝塚： 石神貝塚は、縄文後期初頭から晩期初頭にかけて営まれた集落址である。関東平野に岬のように張り出している、台地の先端に位置している。貝塚の最下層、堀ノ内 2 式期の第 1 号住居址より、「無文の深鉢形土器の中に、蛇紋岩製の 2 点の美しい磨製石斧が内蔵されて発見された」（埼玉考古学会 1975）。床面直上レベルにあった土器は発見当時つぶれていて、復元図を見ると胴下半が失われていたようだ。

2 点の石斧は「破損品だが共に美しく（中略）、土器に入れられ大切に住居内に保管されていたものであろう」と推測されている。残存部の大きさは、1 点は基端部で約 10.0cm、もう 1 点は刃部で約 6.7cm であった。

群馬県吉井町腰巻(注 29)： 工事現場から、セットのような 7 点の磨製石斧が見

つかった事例で、遺跡名はついていない。「重機のシャベルによって掻き出されたもので、持ち込まれたものは大小 7 点の磨製石斧と鉢形と思われる土器片だった」（梅沢・飯島 1983）「供出土器片から縄文晩期と見られ、土器体部の最大径は 35cm 以上と推定される」。

7 点の石斧は「若干の刃こぼれを有するものもあるが」ほぼ完品で、「個人あるいは単位集団の保有した 1 セット」と考えられている。最小は基端部を欠く為、現存長で 6.05cm、重さ 35g。次いで、7.43cm、34g、9.26cm、162g、10.01cm、118g、12.96cm、252g、19.30cm、914g で、最大の石斧は長さ 18.0cm、重さ 982g。7 点の総重量は 2497 g であった。

2. 甲信越地方

山梨県富士吉田市上中丸遺跡(注 30、写真 10)： 当遺跡は発掘間もないため、まだ正式な報告書が出ていない。2007 年度下半期『遺跡調査発表会要旨』の「上中丸遺跡」を見ると、「磨製石斧 8 点と黒曜石 1 点を納めた、縄文時代中期末葉の注口土器が、径約 20cm の土坑に埋設された状況で発見された。(中略) その直上で、全長 40cm の扁平な石を確認」となっている。

実見した土器は胴部に被熱痕があり、富士吉田教育委員会の篠原氏の所見によると「加曾利 E-4 式と見られる土器の内部には有機物の付着痕が見られ、使っていた土器を再利用したのは明らか」と言う。土器の大きさは、器高 10.09cm、最大径 17.7cm、底径 5.5cm であった。

石斧は緑色の物が多く、一部の石材は凝灰岩と鑑定されているようだ。8 点の中に 1 点、ノミのように細長い斧が混じっていた。石斧の長さ・重量は調査番号順に、12.4cm、41g、11.0cm、260g、10.2cm、168g、9.7cm、137g、9.2cm、111g、7.7cm、83g、5.7cm、17g、7.7cm、92g で石斧の総重量は 594g である。石斧の上に置かれていた黒曜石は、重量 420g とかなり大きなもので、石斧と合わせた重量は 1014g になった。

山梨県秋山村小和田原遺跡(注 31)： この遺跡からは、黒曜石の原石 60 点が詰められていた格納土器が報告されている。「畑開墾中に石囲い炉と共に発見された。バラバラだったため土器は復元されていないが、(中略) 口唇部直下に把手がつき、胴上半に最大径を有する鉢形土器で、口径約 22cm、器高約 27.5cm、底径 7.0cm を計る」(奈良・保坂 1993)。縄文時代中期末葉の加曾利 E-4 式に推定されると言う。黒曜石は最大 80g、最小 7g で、60 点の合計は 2163g となった。

山梨県都留市尾咲原遺跡： 7 点の黒曜石格納土器が見つかった尾咲原遺跡は、前述の小和田原遺跡から 10 数キロ西に位置している。出土状況は「屋外の配石中に、埋設された状態で出土した。土器は口縁部が欠損しているが、残存器高

12.1cm、底径 5.6cm の小型土器で（中略）中期末葉加曾利 E-4 式に比定される」（奈良・保坂 1993）。7 点の黒曜石のうち 2 点は剥片・剥離をおこなった石核で、大きい石核は 69g あり、7 点の重量を合計すると 219g であった。

長野県長野市宮崎遺跡： 宮崎遺跡からは、1948 年に磨製石斧入りの埋納土器が、1985 年の発掘調査では黒曜石の塊が収納されていた土器が見つかっている。1948 年の発掘は個人の発掘だったため、報告されたのは 1982 年である。「敷石住居址様の遺構の、1m 四方の敷石の下に縄文施文の鉢形土器が埋地され、その中に使用痕が全く認められない定角式磨製石斧 4 点が収納され、付近に小型磨製石斧 1 点と耳栓(注 32、写真 11)が置かれていた」（宮下 1982）。耕作土が浅いため依存状態は不良で、遺構の詳細は明確にできなかったと言う。

1985 年の発掘調査で見つかった黒曜石入りの土器は「一枚の敷石を蓋にして埋め込まれ、その下には別の土器底部が存在していた。土器は中期末の加曾利 E-4 式と見られ、中には黒曜石の塊 10 点と頁岩(注 33)の碎片が多数見つかかり、石器製作との関連が予想される」（長野県教育委員会 1988）。収納土器、その下から発見された土器底部いずれにも、煮炊きに用いた痕跡が認められ、「黒曜石保管用の容器」として再利用されたことがわかる。土器の底部に収められていた黒曜石塊中、最大のものは 200g を量り、自然面を残したものが多い。

長野県長野市安庭遺跡： こちらは農作業中に偶然発見されたものである。報告者によると「本土器を囲むようにして 4 個の自然石が立ち並び、土器の下に一枚の石を敷き、さらに蓋として石をかぶせてあった。中には大小 200 個に近いチャート片と卵大～親指大の黒曜石片が 2, 3 点混じっていた。（中略）本資料は全長 33.5cm、口径 23.0cm の縄文中期末葉に位置すると考えられる両耳付きの甕形土器である」（百瀬 1975）。

長野県岡谷市志平遺跡(注 34、写真 12)： 「12 個の黒曜石が入った深鉢土器が見つかった」と言う、志平遺跡の存在はネットで知った。発掘者の一人山田武文氏の所見では「大小 13 点の黒曜石原石が入った深鉢土器は、底部は存在しているが口縁部と横腹を欠くため大きさを特定できない。縄文中期後葉～後期初頭のもの」と推定している。13 点の黒曜石は、最大重量 42.5g 総重量は 250g であった。10km 離れた地域の集積拠点、梨久保遺跡(注 35)との関連が考えられる」とのことだった。土器の形状・大きさなど現時点ではわかっていない。報告書の完成が待たれる。

長野県下伊那郡瑠璃寺前遺跡： この遺跡からは、「埋甕の中に石棒(注 36、写真 13)を直立させる」と言う、特異な状態の埋設土器が発掘されている。報告書の内容を写すと「埋甕は波状口縁を持つ鉢形土器で、胴部は大きく破損して孔があげられている。その孔の部分は北側を向いて埋められ、床面下 25cm 程入って口縁 8cm が外に出ていた。（中略）石棒はその中にほぼ直立するように立てら

れ、正面は火にあたったらしく剥落がいちじるしく、その部分の土器も焼けている」(長野県教育委員会 1971)。

この出土例は、石斧や黒曜石が入れられていたケースとは性格が異なるとは思ったが、土器を容器として利用している、とすることで加えた。土器は称名寺式(注 37)の深鉢形で大きさは、「器高 31.0cm、口径 26.0cm、底径 10.0cm」である。

新潟県津南町正面ヶ原 A 遺跡： 苗場山の西北山麓に広がる河岸段丘では、2 万 8 千年前の石斧が見つかっている。津南町は、旧石器時代から縄文の各時代にかけて、1 万年間もの人々の暮らした痕跡が残る、日本でも代表的な遺跡の宝庫だと言う。「正面ヶ原 A 遺跡は縄文晩期の大規模な集落址で、広場の東側縁に埋設された佐野式(注 38)土器の中から、丸礫 14 点と蛇紋岩製の磨製石斧 2 点が検出された」(津南町教育委員会 1999)。概要報告書抄録のため詳細な記述はない。

3. 東北地方

福島県耶麻郡博毛(ばっけ)遺跡(注 39)： 耶麻郡(現喜多方市)高郷村の博毛遺跡は、縄文時代中期～後期の土坑址である。「4 号土坑は直径 23cm と小さなピット状を呈している。この土坑からは、大木 8b 式(注 40)土器が合わせ口状になって検出され、中から磨製石斧 4 点とフレイクが 1 点出土した」(福島県耶麻郡高郷村教育委員会 1985)。加曾利 E 式土器の成立を促した大木 8b 式土器は、今回収集した資料中最古の出土例であった。

福島県福島市宇輪台遺跡： 36 号住居址からは安山岩製の磨製石斧が、完形の注口土器に接するような形で出土している。土器は「大木 10 式期の胴下半に最大径を持つ土器である。側面に 2 ヶ所紐かけ状の突起が付き、口縁部に注口がつけられている」(福島市教育委員会 1993)。報告書の配置図を見ると、複式炉の長軸上に位置する柱穴上に横たわった形で発掘されている。これが埋納と言えるかどうかはわからないが、石斧と注口土器との関係が認められる事例として加えることにした。器高 25.5cm、口径 11.6cm、胴部最大径 16.8cm、底径 7.5cm であった。

秋田県秋田市秋大農場南遺跡： この遺跡では、埋設された土器の中から磨製石斧 10 点が検出されている。土器の中に入っていた石斧の数としては、出土例中最大である。だが報告書の記述は「調査区の西側から検出された。(中略) 6 号の鉢形土器の中からは磨製石斧 10 個が入った状態で検出された」(秋田市教育委員会 1992) と短い。土器の上部は大きく欠損している。実測図によると、残存器高 14cm、残存口径 18cm、底径 6.6cm になる。収蔵されていた石斧は、4.2～5.7cm とやや小さめの物が 6 点、13.8～16.9cm までの大き目の物 4 点の

計 10 点であった。石材の記述はない。

秋田県田沢湖町瀧前遺跡： 田沢湖の北東岸、湖を見下ろす高台に瀧前遺跡は位置している。この遺跡の SI321 竪穴住居址床面から、「国内最大」のアスファルト(注 41)塊が入った埋設土器が発掘されている。「土器は底径 9cm、開口部径 16cm、高さ 18cm の上部欠失する深鉢形である。正位埋設で内部にはアスファルトだけが詰められていた。(中略)アスファルトだけの重量は 2490g であった」(秋田県教育委員会 2000)。土器形式は特定されていないが、縄文時代後期前葉と推定されている。

岩手県二戸市大向上平遺跡(注 42、写真 14)： 蛭沢式(注 43)に比定される土器は「周囲を 23x24cm、深さ 14cm に掘り込んだピットの中に、正位の状態で埋設されていた。土器内部から深鉢土器破片 3 点、その下位から硬玉製大珠 2 点、アマオブネ貝(注 44)製の玉 73 点以上が得られた。住居址に伴うような形跡はない」(岩手県文化振興事業団 2000)。土器片は蓋の役割を果たしていたようだ。実測図により大きさを計算すると、器高 13.4cm、口径 10.0cm、胴部最大径 17.6cm、底径 6.7cm となった。器形は胴の中央部が膨らみ、横からだとソロバン玉のように見える。上半分に文様が施されていた。

報告書には、「糸魚川産のヒスイ(注 45、写真 15、16)・南海産の貝玉が、希少価値の高い占有品であったことを考慮すれば、持ち主は当時の二戸地区を強い権力と経済力で支配していた人物であったと推測できる」と記されていた。

岩手県九戸村田代 IV 遺跡： 出土状況は「深鉢形土器は倒立した状態で埋設されており、口縁部が倒立し頸部付近より折れて横倒しになった状態で検出された。(中略)土器内より石製品が 2 点出土している。(中略)土器は大木 9 式期併行の土器であり、器高 75cm、口径 37cm、胴部最大径 46cm、底径 16cm である」(岩手県文化振興事業団 1995)。深さ 20cm ほどの穴を掘って石の垂飾品を置き、それを隠すように土器が被せてあったが、3.8x2.0x1.2cm と 2.9x2.0x0.9cm の小さな石製品を納めるには、器高 75cm の土器はかなり大きい。分析の結果石の垂飾品(写真 16)はヒスイではなく、チャート質細粒緑色凝灰岩製(注 46)と判明している。担当者の所見では、「産地は特定されていないが、近くの北上山地でも採取可能な石材」とのことだった。近くに配石遺構はあるが、住居址などは認められていない。

青森県八戸市笹子遺跡： 埋納土器を調べ始めて以来、どの文献にも代表例として載せられていたのが、東京都桜塚・長野県宮崎とここ青森県の笹子の 3 遺跡だった。「壺形土器 1 固体が、磨製石斧 3 点を納めた状態で出土した。この土器に伴う遺構は検出されなかった。(中略)十腰内 I 式(注 47)と考えられるこの土器は、口縁部から頸部にかけて破損している。大きさは、現器高 8.2cm、最大胴径 10.2cm、底径 6.0cm である」(八戸市教育委員会 1988) と、この土器を埋め

るためのピットがあったかどうかは判然としない。

収納されていたのは全て定角式磨製石斧で、2点に使用痕が認められている。長さ・重量は5.9cm、14.8g、7.6cm、75g、8.4cm、95gで総重量は184.8gだった。石材は全て緑色凝灰岩である。土器は「器形は胴中央部が「く」字状に張り出し、算盤玉の形状を呈する。施文は胴部上半に見られる」とあり、岩手県の大向上平遺跡の埋設土器と似た形(注48)をしている。

第3章 収集資料の分析

地域別にまとめた収集資料は26例になったが、時代も収納品も混在しているため比較がしにくい。そこでまず内容物により、石斧・大珠など加工品が入れられた物と、黒曜石・アスファルトなど原材料が入れられた物とに分けて考えてみた。

● 石斧・大珠・貝輪・石棒などの加工品が入れられた事例

博毛遺跡(福島)、田代IV遺跡(岩手)、塚越向山遺跡(埼玉)、上中丸遺跡(山梨)、武蔵台遺跡(東京)、宇輪台遺跡(福島)、御殿山遺跡(東京)、瑠璃寺前遺跡(長野)、桜塚遺跡(東京)、古作貝塚(千葉)、上土棚南遺跡(神奈川)、久保ノ坂(No.4)遺跡(神奈川)、石神貝塚(埼玉)、大向上平遺跡(岩手)、笹子遺跡(青森)、吉井町腰巻(群馬)、宮崎遺跡(長野)、正面ヶ原A遺跡(新潟)、秋大農場南遺跡(秋田)、以上19例。

● 黒曜石・アスファルトなどの原材料が入れられた事例

安庭遺跡(長野)、塚越向山遺跡(埼玉)、上中丸遺跡(山梨)、小和田原遺跡(山梨)、尾咲原遺跡(山梨)、宮崎遺跡(長野)、志平遺跡(長野)、北原(No.9)遺跡(神奈川)、瀧前遺跡(秋田)、以上9例。

さらに両者を土器編年により年代別に再編成し、前者をAグループとしてA表に、後者をBグループとしてB表にまとめた(注49)。年代順並べ替えに用いた簡易土器編年表に、収集遺跡を当てはめた物はC表とした(注50)。

これらの表で各遺跡の出土例を比較検討してみる。

1. 出現時期

資料中最も古い出土例は福島県の博毛遺跡で、縄文中期中葉の大木8a式、新しいものは秋田県の秋大農場南遺跡で、晩期大洞C2式であった。石斧など加工品が入れられていたAグループでは、中期6事例、後期9事例、晩期4事例と後期にやや多くみられる。地域は関東地方から東北まで広い範囲に及んでいた。

黒曜石が入っていた土器は中期後葉に集中している。地域としては、長野・山梨・埼玉・神奈川の関東甲信地方にとどまり、東北地方での出土例はなかつ

た。26 事例の分析から埋納は、加曾利 E 式期に始まって堀之内期にかけて盛行し、大洞・安行期まで続いていたと読み取れる。縄文時代中期中葉から晩期初頭までの 1500 年ほどの間、遺物の土器埋納行為が行われていたことになる。

これを小山修三氏による縄文時代の推定人口（小山 1996）と重ねてみると、別の側面が見えてくる。縄文時代の人口のピークは中期にあり、東日本では 23 万人あった。それが後期には 12 万人と半減し、晩期には 4 万人とピーク時の 1/8 へと激減している(注 51)。人口のピーク時に始められた遺物の土器埋納は、寒冷化と人口減少の中でも行われ続け、弥生時代の到来と時を同じくして終焉をむかえたようだ。

2. 出土状況

26 例の資料中、住居内から検出されたものは A グループ 7 例、B グループ 3 例の 10 事例（塚越向山は重複）あった。出土状況を住居内であったかどうか、土器を埋めるためのピットの有無、上部が何かで隠されていたかどうかをチェックし、C 表上に追記した。

ピットが認められたもの：博毛遺跡、上中丸遺跡、御殿山遺跡、瑠璃寺前遺跡、古作貝塚、上土棚南遺跡、久保ノ坂（No.4）遺跡、大向上平遺跡、宮崎遺跡、正面ヶ原 A 遺跡、秋大農場南遺跡（以上 A グループ）。尾咲原遺跡、宮崎遺跡、北原（No.9）遺跡、瀧前遺跡（以上 B グループ）の合計 15 例。

ピットなし、又は不明：田代 IV 遺跡（埋設目的の掘り込みは確認できず）、塚越向山遺跡（石囲い炉の焼土の上に据えられていた）、武蔵台遺跡（ピットの存在は否定できないが、識別できていない）、宇輪台遺跡（住居址の床面に置かれていた）、桜塚遺跡（持ち込み資料のためピットの有無は不明）、笹子遺跡（出土状況の記述なし）、吉井町腰巻（重機に掘り出されたため不明）（以上 A グループ）。小和田原遺跡（ピットの有無は不明）、志平遺跡（報告書がないため不明）、安庭遺跡（4 個の自然石に囲まれた状態で出土）の 10 例。

蓋の有無：博毛遺跡（土器蓋の上に拳大の礫）、田代 IV 遺跡（垂飾品の上に本体土器を被せる状態）、上中丸遺跡（全長 40cm の扁平な石）、武蔵台遺跡（小型土器）、御殿山遺跡（扁平な自然石）、古作貝塚（蓋付き）、宮崎遺跡（石斧入り：敷石の下）、以上 A グループ。宮崎遺跡（黒曜石入り：敷石を蓋に）、安庭遺跡（石の蓋）、以上 B グループの合計 9 例であった。

蓋で内容物を隠すと言った、隠蔽の形を取っているものは掘り込みの事例ほど多くは見られない。「埋めかつ蓋をする」ように入念に隠してあるケースは 6 例、どちらかの隠蔽工作をしているものを挙げると 11 例で、合計 17 事例になった。これは出土事例の 6 割強にあたる(注 52)。

3. 埋納品

ヒスイ： ヒスイの大珠(写真 16)が入れられていた土器は、岩手県大向上平遺跡のわずか 1 例であった。分析の結果このヒスイは糸魚川産と確認されている。同じ岩手県の田代 IV 遺跡で、石製の装飾品が土器を倒立させて隠された形で出土しているが、こちらはヒスイではなく緑色凝灰岩製であった。

大向上平遺跡の埋納土器の中にはヒスイ大珠の他に、貝製品 3 点とアマオブネ貝製の玉 73 点が入っていた。希少価値の高い糸魚川産のヒスイと南海産の貝を所有していた人物として報告書は「当時の二戸地区を強い権力と経済力で支配していた人物であった」と推測している(注 53)。

石斧： 加工品が入れられた出土例では、石斧が収蔵されたものが 19 例中 15 例と圧倒的に多い。複数出土遺跡の報告書には、当時の石斧セットが一括埋納されていた可能性(写真 17)も示唆されている。実測図や重量が記してある、8 ヶ所の遺跡出土品を D 表にまとめ比較してみた(注 54)。

注口土器に複数入れられた石斧例として、塚越向山と上中丸遺跡を比較してみる。石斧の大きさを、6~8cm を小形、10.0cm 前後を中形、12cm 前後は大型と 3 つに分けてみると、その内容が近似していることがわかる。武蔵台遺跡はそのセット内容が少し大きめになっているようだ。晩期になると 16cm を越す超大形の石斧も埋納されている。吉井町腰越では全長 19.3cm の石斧や、1 点で 1kg 近い重量を持つ石斧まで出土している。

全体を俯瞰すると、中期・後期・晩期と時代が下るに連れ、土器に入れられる石斧が徐々に巨大化していくように見える。ただ資料数が少ないため、今回の収集資料が当時の石斧セットを現しているかどうかまでは判らなかつた。

黒曜石とアスファルト： アスファルトが入っていた事例(写真 18)は各地で報告されているが、これらは原料の保管・備蓄であって本論の論旨とは異なると判断し、代表例として国内最大重量の土器入りアスファルトが発掘された潟前遺跡の紹介にとどめた。そのため、B グループでは潟前遺跡以外総てが黒曜石入りの事例となった。石斧入り出土例は広範囲に広がっているが、黒曜石が入れられた事例は関東甲信に限られる。これは黒曜石原産地の中部山岳地方と、消費地としての関東平野とを結ぶ交易ルート(写真 19)があつたことを想像させる。

黒曜石の原産地から関東地方へは、諏訪湖から甲府盆地を抜ける南ルートと、上田方面から群馬方面を経由する北ルートの存在が推定できる。甲府盆地から富士吉田を経由して丹沢を越せば関東平野の南端に達し、佐久平から秩父の山を越えれば小鹿野町に至る。富士吉田の上中丸遺跡例は南ルート、小鹿野町の塚越向山遺跡例は北ルート上に位置していると言える。

土器入り黒曜石の出土は中期後葉に集中し、後期の出土例は北原 (No.9) 遺跡だけであつた。縄文前期の黒曜石は威信財としての側面を持っていたと言う

大工原氏は、「原石の土器への収納が中期末葉に限られているのは、流通の初期に新たな物質として一時的に価値が高かった」（大工原 2007）からと考えた。

中期の人口拡大と集落数の増加時期には「より多くの集落に黒曜石の原石が集積され」（斉藤 1985）、後期・晩期には黒曜石にかわりチャートの増加が認められるようになる。身近な所で採取できるチャートの利用増加が、黒曜石埋納を終わらせたとも言えよう。

第4章 埋納に使われた土器

報告書ごとに図版の縮尺が異なるので、各容器の大きさ比較をするため縮尺を統一し、Aグループを図1-1、1-2、1-3に、Bグループを図2-1と2-2にまとめた。この図版を参考にしながら、埋納に使われた土器について考察する。

1. 注口土器

A・Bグループ共に、物を入れるのに適した深鉢形や壺型が多いが、中期に限ると注口土器(写真20)が圧倒的に多い。Aグループでは6例中4例、Bグループでは7例中2例であった。Bグループの2例は、石斧と共に黒曜石が入れられた塚越向山遺跡と上中丸遺跡のケースであるため、黒曜石だけを収納する容器としては使われていない。注口土器は、石斧の埋納にしか使われていないと言うことになる。

注口土器とは管状の注ぎ口が付いた土器を指し、有穴罌付土器(写真21)から派生したと言われている。有穴罌付土器は「平らな口縁と、その直下にめぐらした罌のような凸帯、それに接して箸でつついたような小穴があげられている」（井戸尻考古館 2006）土器で、発酵を促す酒造器と目されている。前期後葉に原型が現れた時は、「浅鉢形土器の口縁部に沿って多数の小穴が穿たれたもの」（丹野 1985）であったが、中期中葉になると「樽・壺・円筒・瓢箪形など多様化が進む」。有穴罌付土器は中期末葉には姿を消すが、注口土器は後期に入ってさらに多様な発展を見せる。有穴罌付土器には「世界最古の太鼓」（小山 2006）説もあるが、液体を注ぐ機能を持った注口土器への変遷をかんがみて、本論では酒造器説を取る。

注口土器の中に入れられていたのが酒だと仮定すると、その容器は日常的ではなく祭りに使われていたことになる。祭りに欠かせない「特別な」液体を入れる為に考案された注口土器が転用にあたって、「大切なものを入れておく器」（大田区立郷土博物館 1987）になったと言われるのは、土器の背景にあるその非日常性にある。

「注ぎ口は男性表現」（長沢 1997）と言う説がある。長沢氏は楕円の口縁は

女性器を表すとし、楕円の口縁を持つ注口土器を「男女の結合を表現した」容器と推測している。土器は女性の子宮にも例えられる事から、楕円の口縁を持たない注口土器でも、男女の交合ひいては豊穰への祈りを表現しているとも言える。「男のものである石斧」(佐原 1994) を、男女交合を表現する注口土器に入れて埋納する、他の土器ではなくわざわざ注口土器を選んだ、背景には単に「隠蔽」と言う以上の精神性を感じる。

中期の縄文人は、石斧を入れ納める容器として注口土器を選んだ。後期に入ると注口土器は独自の変化を遂げ、「しばしば特定の方法で墓坑内に埋納」(中村 2008) されるようにもなっていく。副葬品としての需要である。しかしこの時期、注口土器に石斧を入れた事例は見つかっていない。有穴鏝付土器から派生した直後と見られる、中期末葉にだけ石斧入り埋納事例が見られる。もし注口土器に石斧を納めることが重要であれば、後期に出土例があってもおかしくないはずだ。注口土器が埋納容器として後期に引き継がれなかった背景には、中期末に大きな文化的・社会的変化があったと考えざるを得ない。

2. 土器の大きさと石斧の数

土器の大きさと入れられる石斧の数に、何か関連はあるのだろうか。A グループ最古の出土例は博毛遺跡で、器高 13cm、深めの小井といった大きさの土器に、2.6cm～5.6cm の小形の石斧が 5 点入れられていた。このセットは収集資料中最も小さく、「新潟産と思われる上質の蛇紋岩」を磨いて作られており、石斧と言うより装飾品のようにも見える。

中期に多かった注口土器埋納例ではどうであろうか。器高 11cm 胴径 18cm の注口土器に、8 点の石斧と 1 点の黒曜石原石を入れた上中丸遺跡の場合は、小さな石斧を下に、隙間の無いように口縁部まで組み上げている。それより一回り大きな注口土器を用いていた塚越向山遺跡では、10 点の石斧を粘質土で埋め固め、その上に黒曜石をぎっしりと入れていた。武蔵台遺跡では、器高 30cm の瓢箪型注口土器から 6 点の石斧が見つまっている。石斧を納めた下半部の球状部分の大きさは、塚越向山遺跡例と近い。

後期に入ると石斧は深鉢・浅鉢、壺形土器の中に入れられるようになる。容器として最も小さかったのは、現存高 10cm ほどの笹子遺跡の土器だった。現代風に言うなら大振りのご飯茶碗程度で、男性の手の中にすっぽり入るぐらいの大きさである。この中に 5.9cm～8.4cm の小形石斧が 3 点入れられていた。器高 14.5cm の桜塚遺跡では、4 点の石斧が入れられていた。久保ノ坂 (No.4) 遺跡の出土品と、完形なら近似寸法と思われる上土棚南遺跡の朝顔形深鉢形土器だが、石斧の収納数は前者 1 点に対し、後者は 7 点も検出している。

晩期にあたる吉井町腰巻では 7 点、秋大農場南遺跡からは 10 点の石斧が見つ

かっており、15cm 以上の大形石斧がそれぞれ 2 点も入っていた。入れ物となった土器だが、前者は最大径 35cm 以上と推測されてはいるが底部の一部、後者は現存高 14cm までしか確認できておらず、完形時のサイズはわからない。

全体を通して見れば土器の大きさと石斧の数に特定のルールが見えてくると考えたが、収集資料の埋納石斧は材質もサイズも異なり、使用品・未使用品も混在している。住居址の内と外、土坑の有無などの出土状況、土器の形状・サイズもまちまちで、単純な比較は難しい。石斧の複数埋納で関連性が認められたのは、塚越向山・上中丸・武蔵台遺跡の 3 例で、いずれも加曾利 E-4 式の注口土器に入れられ、大中小の 3 サイズを選んで収めている。特に塚越向山・上中丸の 2 例は、形状が近似した鉢形注口土器下部に石斧を納め、その上に黒曜石の原石を配置するなど共通点も多い。大中小の 3 サイズが認められる例は他に、晩期出土の吉井町腰巻と秋大農場南遺跡の 2 例があるが、両者とも土器の大きさが不明瞭なので、正確な比較はできない。

田中英司氏は「デポと交易」の中で秋大農場南・武蔵台・桜塚・笹子 4 遺跡の出土遺物から、「収納数と土器の大きさはほぼ比例」していると判断した。しかし武蔵台遺跡と秋大農場南遺跡とでは 1000 年ほどの時間差がある。土器の形状の相違は用途の違いであり、意味するところも異なると考え得る。桜塚遺跡・笹子遺跡の場合は納入石斧の大きさ・材質から、「儀礼に伴う非日用品」と推察されている。これらを秋大農場南遺跡・武蔵台遺跡同様の、日用石斧セットとして扱うには無理があるのではないだろうか。以上、この 4 事例をもってして石斧納入数と土器の大きさの関連を判断するのは難しいと考える。

3. 土器は運搬容器であったのか

遠く離れた地域で、似た形式・文様・形状の土器が出土することがある。交易の対商品として土器自体が運ばれた、婚姻または戦いで作り手自身が移動した、隣接地住民の模倣で広がった、など様々な場面が想定できる。

「切断」という特異な形状を持つ切断壺型土器(注 55、写真 22)は、蛭沢式期の東北地方で作られ始め、やがて関東地方まで分布を拡げる。これは「隣接する異なった土器型式の分布圏に順次搬出され(中略)、各々の地域で模倣された結果」(阿部 1985)と捉えられている。土器自体が運ばれたケースとして、長野県屋代遺跡出土の大木 9a 式土器がある。縄文中期後葉に東北地方に広く見られた土器で、胎土分析の結果「遠隔地からの搬入品である可能性が高い」(川崎 2006)と考えられている。

各地の出土土器遺物から、土器が移動していたことは疑いがない。しかし、土器自体に交換財としての価値があって持ち運ばれたのと、土器が運搬具だったかでは意味が異なる。田中氏は埋納土器を「携帯用に専用に作られた容器」(田

中 1995・2000・2001・2007) であると述べているが、それでは石斧や大珠は、運搬用の造形がされた専用容器に入れられていたのであろうか。収集資料から検討してみる。

携帯用の装置として示された把手の機能をみる。Aグループの埋納土器 19 点の内、5 点が中期中葉から後期初頭に属する注口土器で 4 点に把手が付いていた。注口土器ではないが把手が付いていた事例は、貝輪が入っていた古作貝塚の 1 点がある。注口土器は手に持って傾け、中の液体を注ぐ目的で造形されている器である。紐通し状の把手に縄を掛ければ持ち運びにも便利だが、その形状は次の時代に受け継がれていない。

後期も中葉以降になると把手は消え、深鉢や壺型土器が用いられるようになる。「紐かけや把手など携帯や運搬するための造形」がない土器が、石斧を納めて埋める入れ物として選ばれるようになった。晩期には口径 35cm 以上の大きさの土器も出土している。浅鉢土器や大形の土器は長距離移動には不向きで、当時の人々は埋納土器に、運搬具としての用途を想定していなかったと考えざるを得ない。

では専用容器としてはどうだろうか、石斧 10 点と黒曜石原石 3 点が入っていた塚越向山遺跡の場合をしてみる。「口縁部が被熱により灰褐色に変化し、胴部上半には炭化物の付着が顕著」とあるように、他の用途で使っていた土器の再利用品である。上中丸遺跡の注口土器には把手がない上、「被熱痕があり内部のひび割れには有機物が付着」とこちらも日用品の二次利用と考えられる。両者は、土器を入れて持ち運ぶために作られた「専用の容器」、とは言い難い。

もし把手つき土器に器物を埋納することが重要なら、それは後期にも引き継がれるはずだ。しかし後期から晩期の事例に把手は見られない。「運搬用の造形」の根拠が把手の存在や土器の大きさであるのなら、それは後期後半の事例には当てはまらない。また、専用で作られた容器を用いることが暗黙の了解だったとしたら、日用品の再利用をすることは有り得ないのではないだろうか。

以上、田中英司氏のデポ論を参考に収集資料の分析と検討を行ってみた。時代別に分類してみると、個々の事例で「専用で作られた」「持ち運び用だった」と論じることはできても、埋納土器遺構総てをまとめて「専用で作られた運搬具だった」と言い切ることはできないと、氏の見解とは異なる結果が導き出されてしまった。

おわりに

唐古・鍵遺跡の出土品から縄文時代の埋甕を連想したことをきっかけに始めた研究だが、「装飾品を納める宝石箱的な使われ方」という予想に反して実際は、

ヒスイ大珠 1 例、貝輪 1 例と装飾品の検出事例は少なかった。一方、磨製石斧や黒曜石など、実用品を収めた事例の多いことに驚かされた。

埋納土器を調べることにより、縄文中期と後期の間に文化的な断絶があることが見えてきたのは大きな収穫だった。縄文時代と言う大きな塊で見てしまいがちな時代ではあるが、一万年近い時間の中でいくつもの変化があったことを、土器形式の変遷や埋納行為の盛衰から垣間見ることが出来た。

今回は土器の考察がテーマだったため有機物素材の遺物には触れられなかったが、運搬具としての土器の適性を調べるうち、縄文人が植物素材(注 56)を活用し運搬具としても用いていたことが判ってきた。新潟県江添遺跡出土の編布(アングイン)(注 57)圧痕のあるアスファルト塊(注 58、写真 23)や、青森県三内丸山遺跡出土の縄文のポシェットなどがその良い例である。

石斧を土器に入れて携行するより、籠や皮袋を利用する方が実用的ではないかと考えられることから、器物収納容器として土器を選んだ、その意図を探る試みを今後も続けて行こうと思っている。

最後に、担当教員としてご指導頂きました放送大学の五味文彦先生(東京大学名誉教授)、多くの便宜をはかり土器編年表の作成にも力を貸して下さった東京都埋蔵文化財センターの小葉一夫氏、八ヶ岳山麓の土器形式など宮坂英弑氏の情報を提供して下さった尖石縄文考古館の功刀司氏、報告書作成前にも関わらず写真及び資料の提供をして下さった岡谷市教育委員会の山田武文氏、富士吉田市教育委員会の篠原武氏には大変お世話になりました。

井戸尻考古館の樋口誠司氏、山梨県立考古博物館の保坂康夫氏、浅間縄文ミュージアムの堤隆氏、福島県文化財センターまほろんの芳賀英一氏、諏訪市教育委員会の高見俊樹氏、小鹿野町教育委員会の山本正実氏、群馬県埋蔵文化財センターの飯島義雄氏、岩手県埋蔵文化財センターの三浦謙一氏、新潟県埋蔵文化財センターの山本肇氏の各氏に、深くお礼を申し上げる次第です。

追記

この報告書は、放送大学に提出した 2009 年度卒業研究を一部手直したものである。「埋納」の言葉を用いたテーマに関して、「埋納とは宗教的な要素を含んだ言葉ではないのか。読者に先入観を与え土器の用途を限定することになりはしないか。」と面接審査の際に試験官より指摘された。しかし、テーマ設定時には宗教的意味合いを持たせる意図はなく、又適切な言葉を未だ思いつかないことから本文中の用語の変更はしなかった。今後遺物収納土器を表現する専門の用語が創出され、研究者間で承認された時点でそれに従うこととする。

注

- (注1) 唐古・鍵遺跡：弥生時代前期から後期まで一貫して継続していた環濠集落遺跡、奈良県田原本町にある。1992年、楼閣が描かれた絵画土器が出土して有名になった。その三層の楼閣は復元され、唐古池のほとりに建っている。大和王権成立の地と目される纏向遺跡建設時には環濠の手入れがおろそかになっていることから、唐古・鍵集落の住民が建設の手伝いに借り出されたと考えられており、その関連も注目される。
- (注2) 褐鉄鉱容器とヒスイ勾玉：展示ケースには「中国では褐鉄鉱の中の粘土が薬として利用されました。唐古・鍵ムラの人がそれを仙薬として使っていたならば、2000年前の弥生時代に中国の神仙思想を理解していたこととなります」（唐古・鍵ミュージアム 2007）とあり、中国の神仙思想との関連で出土品を解説していた。
- (注3) 褐鉄鉱：水酸化第二鉄を主成分とする鉱物。縄文時代には赤色顔料としても用いられた。
- (注4) ヒスイ（翡翠）：半透明の緑色を呈する輝石。硬度6.5～7と硬いため、硬玉とも呼ばれる。産地は日本、メソ・アメリカ、ビルマなどがあるが、ビルマ産のヒスイが知られるようになったはごく新しい。先史時代の世界二大ヒスイ文化圏と言え、日本列島とユカタン半島周辺地域である。有名なパレンケ遺跡パカル王のヒスイの仮面は、メキシコ市にある「国立人類学博物館」で見ることが出来る。日本での主な原産地は新潟県の糸魚川周辺である。
- (注5) 勾玉：その形状は、猪の牙から取った、胎児の形であるなどの説があり、半月形、「く」の字形、「C」の字形、「J」の字形と様々な表現がされている。以前は日本固有の形と思われていたが、古代の朝鮮半島にもヒスイ以外の石材で作った勾玉状の装飾品が出土している。
- (注6) 埋甕を連想：長野県茅野市尖石考古館の写真展示で見たことがあった。確認のため考古館を訪問し、学芸員功刀さんから尖石周辺の縄文時代集落址を発掘調査された宮坂英弼さんの話を聞く。
- (注7) 逆位：倒立状態で埋められた土器。底面が床面と同じレベルになる。
- (注8) 宮坂英弼（ふさかず）：長野県茅野市生まれの在野の考古学者。小学校教師の傍ら、昭和初期から太平洋戦争を挟んでの数十年間、私費で八ヶ岳山麓の発掘を続け、日本で始めて縄文時代の集落址を明らかにした。
- (注9) 報告書：「埋甕」の名称が始めて使われたのは、1950年刊行の考古学

雑誌 36 巻に寄せられた「八ヶ岳西山麓与助尾根先史聚落（集落と同じ意）の形成についての一考察」だった。本論で参考としたのは、1957 年に出された尖石遺跡と与助尾根の総合的成果報告書「尖石」である。

- (注10) 埋設炉：炉床に埋め込まれた土器が検出される炉のこと。火消し壺的に使われていたのか、土器内部が炭化している場合が多い。
- (注11) 唐草文系土器群：曾利式と同時期の縄文中期後半に、長野県の諏訪盆地・松本平・伊那谷の地域に分布する土器様式。（小林 2002）
- (注12) キャリバー形：胴に張りがあり口縁部が内傾する、弾丸のような形状の深鉢形土器。
- (注13) 曾利式：加曾利 E 式が中部山岳地帯にも波及して出現した土器様式。主な分布は、山梨県・神奈川県・静岡県東部と長野県八ヶ岳南麓。（小林 2002）
- (注14) 加曾利 E 式：関東地方の中期後半に形成された様式。東北地方の大木 8b 式（注）の古い部分が関東で改編され、独特な地方相を発展させたもの。5 段階以上の変遷が認められる。（小林 2002）
- (注15) 貝輪：大形の 2 枚貝に穴を開けたり、巻貝を輪切りにしたりして作った腕輪。オオツタノハなど素材供給地が限定される特殊な貝製品は、「何かを象徴する社会的に重要な意味のあったモノ」（忍澤 2007）と目されている。
- (注16) 大珠：体部に一孔を有する大型のかざり玉（藤田 1992）。最古の出土例は縄文前期の山梨県天神遺跡出土のヒスイ製大珠である。「珠」とは本来海の産物である「真珠」を指す言葉だが、それが何故岩石であるヒスイ製品に使われるかは、古代のヒスイ採取法に関係している。富山湾に注ぐ姫川源流付近で産出するヒスイ原石は、河を流れ下って宮崎海岸付近に漂着する。古代人はこの海岸でヒスイを採取したので、海のものである「珠」という言葉が用いられたとされている。
- (注17) 定角式磨製石斧：磨製石斧の形状。磨製石斧の断面図を取ると、四角形・円形・凸レンズ状と、大きく 3 つに分類できる。定角式とはその断面が 4 角形で、四隅に角が認められるものを指す。
- (注18) 蛇灰岩：暗緑色の蛇紋岩の中に白色の方解石が網状に発達し、美しい模様をなしている。磨いて装飾石材に用いる。石斧としては余り利用されていない。
- (注19) 御殿山遺跡：井の頭公園池の西端で発掘された遺跡。武蔵野市は都内でも人気のある住宅地で、戦後の急速な宅地化で市域のほとんどが住宅地となった。この遺跡は「市内において調査することの出来た唯一の縄文時代の集落址」（武蔵野市 1965）である。

- (注20) 土器の共通性：土偶の頭部が収納されていた与助尾根遺跡の土器は曾利3式期、尖石遺跡の土器は曾利4式期で、共に縄文中期末葉。御殿山遺跡の土器は称名寺、桜塚遺跡と古作貝塚は堀ノ内1式期の土器で縄文後期初頭にあたる。
- (注21) 堀之内式：後期初頭から後半にかけて、東日本一円で広く行われた。加曾利B式期を経て、安行式土器様式へとスムーズに連続する。(小林2002)
- (注22) 上土棚南遺跡：特別展図録『縄文文化円熟』横浜歴史博物館2008年で、出土状況と内容物の写真を見ることができる。
- (注23) ベンケイガイ：北海道南部から九州地方、長さん半島南部まで広く分布する大きく頑丈な二枚貝。「弁慶」の強さを連想しての命名。
- (注24) オオツタノハ：生育域が伊豆諸島南部かトカラ列島周辺の島々に限定される特殊な貝。この貝を使った腕輪が東日本を中心に広く分布しており、縄文時代の交易を考える上で格好の材料とされている。
- (注25) サルボウガイ：腕輪の材料として良く利用されていた二枚貝。
- (注26) 塚越向山遺跡：浅間縄文ミュージアムの堤氏より当遺跡を紹介され現地向かう。あいにく実物は貸し出し中だったが、小鹿野町教育センターの山本氏が写真を示しながら説明して下さった。その後寄居町にある川の博物館まで出向き、出土品を見てきた。
- (注27) 注口土器：胴部に注ぎ口をつけた土器。注口の径の小ささから内容物は液体、しかも少量を飲んで目的を達成できる酒だったのではないかと考えられている。初現は縄文前期だが一時途絶え、中期中葉に再び現れるが形式が安定しない。後期初頭の堀ノ内式土器様式になって形態を確立する。東日本に多く、西日本に少ない。(小林2002)
- (注28) チャート：列島に広く分布する堆積岩の一種で非常に硬く、石器の材料として用いられていた。
- (注29) 群馬県吉井町腰巻：岡谷市志平遺跡について発掘者の山田氏より説明を受けた際、穴場遺跡を発掘された諏訪市教育委員会の高見氏を紹介された。早速諏訪市博物館に伺い、穴場遺跡出土の蛇体装飾文的釣手土器を前にお話を伺う。その中で群馬の石斧入り土器の情報を得、報告者飯島さんを紹介してもらおう。翌日群馬県の埋蔵文化財センターに出向き、石斧の説明を受けた。
- (注30) 上中丸遺跡：富士吉田市民俗歴史博物館にて、実物を手に取らせて貰い、発掘者の篠原氏より説明を伺う。報告書作成前にも関わらず、11月発行予定の本の原稿も読ませていただき感謝している。
- (注31) 小和田原遺跡・尾咲原遺跡：2008年に特別展「埋められた財宝」を

開催した山梨県考古博物館に資料集めに出かけた。ここで県下の上中丸・小和田原・尾咲原各遺跡の資料と、田中英司氏の「日本先史時代のデポ」のコピーを頂く。この論文は埋納土器を調べるのには必須とも言うべき資料で、本論をまとめるのに大いに参考にさせてもらった。

- (注32) 耳栓（じせん）：縄文時代の滑車形・臼形をした土製耳飾り。耳たぶに孔をあけてはめ込む、現代のピアスに相当する装飾品。
- (注33) 頁岩（けつがん）：列島に広く分布する堆積岩の一種。板状にうすくはがれやすいことから「頁」という名前が付けられた。
- (注34) 志平遺跡：岡谷市に出向き、発掘者の山田氏からお話を伺う。土器は修復中で実見できなかったが、収蔵されていた黒曜石は手にとって見ることが出来た。来年度報告書発行に向けて資料の分析中とのことで、2009年8月現在では詳しい状況は判らなかった。
- (注35) 梨久保遺跡：諏訪湖盆地北の高台にあり、縄文時代早期から後期の長きにわたり、地域の拠点とも言うべきムラを形成していた大集落遺跡。3万点をこえる黒曜石の剥片や原石が出土していることから、黒曜石の供給基地であったと考えられている。
- (注36) 石棒（せきぼう）：縄文時代中期から晩期にかけて見られる、長い円棒の一端または両端にふくらみをつけた磨製の石器。長さ40～50センチメートルから1メートル以上のものまである。男性器を象徴するとされ、儀礼的・宗教的な用途が考えられている。
- (注37) 称名寺式：中期末葉から後期初頭にかけて見られる、西日本の中津式と密接な関係を有する土器様式。加曾利E式土器の最終段階と並行し、堀ノ内式に続く。（小林2002）
- (注38) 佐野式：縄文晩期前半の長野県北部地域にあった土器様式。長野県山ノ内町、佐野遺跡出土の土器が基準になっている。
- (注39) 博毛遺跡：福島県文化財センターまほろんで資料を頂く。カラー版で見た出土品は磨製石斧の緑も大木8b式土器の文様も美しく、宝石箱と宝石のようだった。
- (注40) 大木8b式：中期後半に東北南部に行われた様式で、深鉢を基本とする。粘土紐の貼付文や沈線によるモチーフに地方色を発揮。加曾利E式土器様式の成立を促した。（小林2002）
- (注41) アスファルト：アスファルトは縄文時代前期ごろから、土器や土偶の補修、石鏃の装着などに用いられていた。主要供給地は秋田県と新潟県で、出土例は東日本に限られている。
- (注42) 大向上平遺跡：岩手県埋蔵文化財センターへの問い合わせで、この地区からヒスイの大珠が入った土器が出土したと聞いた。それまで10

以上の出土例を集めていたが、当初の「ヒスイ製品が多いのでは」と言う予想に反し、内容物は石斧と黒曜石ばかりだった。半分諦めかけていたのでこの情報はうれしく、早速盛岡に向かう。現地では報告書のコピーを頂き、話を伺う。現物は9月末から千葉県博物館で開催される特別展に貸し出し予定のため、梱包中であつたが、特別取り出し手に取らせてもらった。ソロバン状の壺形土器は想像より大きく、大振りラーメン丼ほどのサイズがあつた。ヒスイ大珠は緑も鮮やかな優品で、糸魚川産とのことだった。

- (注43) 蛭沢式:十腰内1式の母胎となつた土器形式。現在では余り使われず、十腰内1式に統合される傾向がある。
- (注44) アマオブネ:伊豆諸島・小笠原に広く分布する、南方系の小形巻貝。出土品は貝の背面を穿孔したもので、断面は半円状を呈する。
- (注45) 糸魚川産のヒスイ:硬玉産地小滝川は姫川の支流にあたり、周辺はヒスイ峡と呼ばれている。1956年に天然記念物に指定された。ヒスイ原石は姫川を流れ、下流の海岸に打ち上げられる。
- (注46) 緑色凝灰岩製:収蔵室でヒスイに似た緑色の大珠2点を「土器の下から出土した垂飾品ですが、こちらは硬玉ではないのです」と出してくれた。大向上平遺跡の大珠と持ち比べてみると、やや軽く、ヒスイのようなヒンヤリ感がなかつた。しかし、単独で見たらヒスイ製品と見間違えてしまいそうだ。
- (注47) 十腰内式:縄文時代後期前半、北海道南西部から東北北部で行われた。深鉢・鉢のほか、壺の発達が目覚しい。(小林 2002)
- (注48) 大向上平遺跡の埋設土器と似た形:笹子遺跡のある八戸市を地図上で確認してみると、岩手県二戸市と境を接し、両遺跡の間は直線距離で40キロほどしか離れていない。現在の行政区は分かれているが、縄文時代は同じ文化圏に属していたと推察される。
- (注49) 資料数:石斧と黒曜石原石が一緒に入れられていた事例は2カ所ある。小鹿野町の塚越向山遺跡と富士吉田の上中丸遺跡の場合は、A表とB表の両方に入れた。その2点の重複があるため、Aグループの資料数19例、Bグループの資料数9例となつた。
- (注50) C表の時期区分:C表の時期区分は土器編年に準拠し、中期≒5000～4000年前、後期≒4000～3000年前、晩期≒3000年前～2500年前頃、とした。
- (注51) 激減した人口:その原因は気候の寒冷化だけでなく、増え続ける渡来人との接触に伴う感染症の影響を示唆する研究者もいる。昨今のインフルエンザの脅威を思うと頷ける仮説である。

- (注52) 自然石の蓋：土器内の石斧を粘質の土で固め、その上に黒曜石を置いた塚越向山の事例、磨製石斧 2 点の上に丸礫 14 点を置いていた正面ヶ原 A 遺跡の事例を、黒曜石や丸礫が蓋として用いられていたと見るのかどうかは判断に迷い、蓋の事例には含んでいない。
- (注53) ヒスイへの憧れ：田代 IV 遺跡の出土品は、威信財としてのヒスイ大珠を持ち得なかった、地方有力者のヒスイへの憧れが作らせたものかもしれない。
- (注54) 石斧のサイズ：幅が記されていない資料もあるため、記入は長さで重量のみとした。
- (注55) 切断壺形土器：成形・文様施文段階の直後に、胴部を上下に 2 分割された土器。きわめて小形で赤色塗彩の施されることが多い。東北から関東地方に分布する。
- (注56) 植物素材：ヤマウルシ、カエデ、クルミ、シナノキ、メダケ、シノダケ、スゲ、ヤマダケ（ネマガリダケ）など。
- (注57) アンギン：もじり編技法の、編んでつくられた布。横木に、両端に重りをつけた糸を多数吊り下げ、これに直交する横材をからげとめていく方法で作られる。ムシロやすだれもこの方法で作られている。
- (注58) アンギン圧痕のアスファルト：縄文時代中期中葉の新潟市江添遺跡から、アンギン圧痕のあるアスファルトの塊が出土し「アスファルトの運搬用に、アンギン製袋の利用が始まったとしなければならない」（渡辺 2007）と報告されている。

参考文献

- 秋田市教育委員会 「秋大農場南遺跡」『秋田市都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書』 1992年
- 秋田市教育委員会 「潟前遺跡(第2次)」『秋田県文化財調査報告書第306集』 2000年
- 安孫子 昭二 「アスファルトの流通と東北の地域圏」『季刊考古学』12、43～46P 1982年
- 安孫子 昭二 「アスファルト」『縄文文化の研究』第8巻 雄山閣、P205～221 1986年
- 安部 芳郎 「持ち運ばれる土器」『季刊考古学』12、P51～62 1982年
- 栗津 義明 「デポの意義—縄文時代草創期の石器交換をめぐる遺跡連鎖」『研究紀要』第7号、埼玉県埋蔵文化財事業団、1～40P 1990年
- 猪越 公子 「縄文時代の住居内埋甕について」『下総考古学』1973年
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 『大向上平遺跡発掘調査報告書』 2000年
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 『田代IV遺跡・田代VI遺跡発掘調査報告書』 1995
- 飯島 義雄・梅沢 重昭 「七つの磨製石斧」『群馬県立歴史博物館紀要』第4号 群馬県立歴史博物館 1983年
- 飯島 義雄・外山 和夫他 「遺跡出土品からみた交易圏に関する研究—縄文時代の石材について—」『利根川流域の自然と文化』 関東地区博物館協会 1988年
- 大田区立郷土博物館 特別展図録『縄文の神秘 注口土器』 1987年
- 岡崎 文喜 『古作貝塚(本文編)』 船橋市遺跡調査会 1982年
- 小笠原 正明・安部 千春 「天然アスファルトの利用と供給」『縄文時代の考古学6』 256～267P 同成社 2007年
- 忍澤 成視 「貝および貝製品の流通」『縄文時代の考古学6』 246～255P 同成社 2007年
- 尾関 清子 「おしゃれな縄文人」『日本人はるかな旅3—海が育てた森の王国』 日本放送出版協会 2001年
- 小田静夫・金子裕之・金子浩昌 「埼玉県石神貝塚の調査」『埼玉考古』13、14号 1975年
- 小田 静夫 「石斧のひろがり」『日本人はるかな旅2—巨大噴火に消えた黒潮の民』 日本放送出版協会 2001年
- 神奈川埋蔵文化財センター 『宮ヶ瀬遺跡群IV 北原(No.9)遺跡(2)』 1994

年

- かながわ考古学財団 『宮ヶ瀬遺跡群 XVI 久保ノ坂 (No.4) 遺跡』 1998 年
- 金関 丈夫 『発掘から推理する』 岩波書店 2006 年
- 唐子・鍵遺跡ミュージアム 『ミュージアムコレクション 1』 2007 年
- 川崎 保 『縄文「ムラ」の考古学』 雄山閣 2006 年
- 川崎 保 『「赤い土器のクニ」の考古学』 雄山閣 2008 年
- 川崎 保 『文化としての縄文土器形式』 雄山閣 2009 年
- 木下 忠 「戸口に胎盤を埋める呪術」『考古学ジャーナル』 42 号 1973 年
- 木下 忠 『埋甕—古代の出産習俗—』 雄山閣 2005 年
- 桐原 健 「縄文中期に見られる埋甕の性格について」『古代文化』 第 18 卷 3 号、1967 年
- 小藁 一夫 「縄文生活—あるいは縄文スローライフ—」『研究論集』 XXV 東京都埋蔵文化財センター 2009 年
- 小林 達雄 『縄文土器の研究』 学生社 2002 年
- 小林 達雄 『古代翡翠文化のなぞを探る』 学生社 2006 年
- 小林 達雄 『縄文の思考』 ちくま新書 2008 年
- 小山 修三 『縄文学への道』 NHK ブックス 1996 年
- 笹津備洋 「小型石斧を収蔵せる注口土器の一例」『石器時代』 第 3 号、62P 石器時代文化研究所 1956 年
- 佐藤 雅一 「正面ヶ原 A 遺跡」<整理進捗報告>『津南町文化財調査報告書』 第 30 号 津南町教育委員会 1999 年
- 佐藤 甦信 「瑠璃寺前遺跡」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—下伊那郡高森町地内その 1』 他日本道路公団名古屋支所 1972 年
- 佐原 真 「ヨーロッパ先史考古学における埋納の概念」『国立歴史民俗博物館研究報告』 第 7 集、P523~573 1985 年
- 佐原 真 「斧の文化史」 東京大学出版会 1994 年
- 佐原 真 「縄文土器と弥生土器」 学生社 2008 年
- 篠原 武 「上中丸遺跡」『2008 年度上半期遺跡調査発表会要旨』 山梨県埋蔵文化財センター 2008 年
- 鈴木 克彦 「硬玉製大珠 (ヒスイ大珠)」『季刊考古学』 第 89 号 2005 年
- 鈴木 克彦 「縄文勾玉—曲玉から勾玉へ—」『季刊考古学』 第 89 号 2005 年
- 鈴木 徳雄 「縄文後期注口土器の成立—形態変化と文様帯の問題」『縄文時代』 3、P63~95 1992 年
- 高見 俊樹他 『穴場 ANABA 1—長野県諏訪市穴場遺跡第 5 次発掘調査報告書』 諏訪市教育委員会 1983 年
- 武居 幸重 『縄文のデザイン』 塚屋図書 1986 年

- 田中 英司 「神子柴遺跡におけるデポの認識」『考古学研究』第 29 卷第 3 号、P56～78 1982 年
- 田中 英司 「日本先史時代のデポ」『考古学雑誌』第 80 卷第 2 号、1～71P 1995 年
- 田中 英司 「斧のある場所」『日本考古学』第 9 号、1～19P 2000 年
- 田中 英司 「日本先史時代におけるデポの研究」千葉大学考古学研究叢書 1 2001 年
- 田中 英司 「デポと交易」『縄文時代の考古学』6、287～296P 2007 年
- 田中 清文 「伊那谷縄文中期後半土器編年への展開」『中部高地の考古学 III』長野考古学会、P127～148 1984 年
- 田中 英世 「千葉市花輪貝塚出土の埋設注口土器の系譜 (1)」『貝塚博物館紀要』第 36 号 P51～78 2009 年
- 丹野 雅人 「注口土器小考」『研究論集 III』東京都埋文センター 1985 年
- 茅野市 『茅野市史』茅野市役所 1986 年
- 堤 隆 『黒曜石 3 万年の旅』NHK ブックス 2004 年
- 戸沢 充則 『縄文人との対話』名著出版 1987 年
- 寺村 光晴他 『武蔵野市史 資料編』武蔵野市役所 1965 年
- 長崎 元廣 「縄文の黒曜石貯蔵例と交易」『中部高地の考古学 III』長野考古学会、P108～126 1984 年
- 長沢 宏昌 「有穴鏝付土器の研究」『長野県考古学会誌』35 号、P19～43 1980 年
- 長沢 宏昌 「山梨県内出土の注口土器について」『山梨県史研究』5 1997 年
長野市埋蔵文化財センター 「宮崎遺跡」『長野市の埋蔵文化財大 28 集』1988 年
- 中村 耕作 「葬送儀礼における土器形式の選択と社会カテゴリーー縄文時代後期関東・中部地方の土器副と土器被覆葬」『物質文化』85 2008 年
- 名久井 文明 『樹皮の文化史』吉川弘文館 1999 年
- 名久井 文明 「縄文時代から受け継がれた現代網代組み技術」『日本考古学』第 27 号、P1～20 2009 年
- 奈良 泰史・保坂 康夫 「黒曜石原石格納の土器と黒曜石について」『山梨県考古学協会史』第 6 号 1993 年
- 西山 太郎 「微隆起線文土器群の変遷と分布ー加曾利 EIV 式期に認められる微隆起線文土器についてー」『研究紀要』10 財団法人千葉県文化財センター 1986 年
- 布目 順郎 『絹と布の考古学』雄山閣 1988 年
- 布目 順郎 『繊維の考古学』染色と生活社 1992 年

- 橋詰 秀一他 『武蔵台遺跡 III』 都立府中病院内遺跡調査会 1996年
- 橋本 康司他 『秩父合角ダム水没地域埋蔵文化財発掘調査報告書』 小鹿野町教育委員会 1995年
- 八戸市教育委員会 「笹子遺跡(3)」『八戸新都市区域内埋蔵文化財発掘調査報告書 VII』 1988年
- 樋口 昇一・桐原 健・宮下 健司 『信州の大遺跡』 郷土出版社 1994年
- 福島県耶麻郡高郷村教育委員会 『博毛遺跡発掘調査報告書』 1985年
- 福島市教育委員会 「宇輪台遺跡」『第三期山村振興農林漁業対策事業水原小谷地区農道改良工事関連遺跡発掘調査報告』 1993年
- 藤尾 慎一郎 『縄文論争』 講談社 2002年
- 藤田 富士夫 『玉とヒスイ』 同朋社出版 1992年
- 富士見町井戸尻考古館 『井戸尻』第8集 2006年
- 堀越 正行 「古作貝塚」『千葉県の歴史』 728～731P 千葉県 2000年
- 宮坂 英弼 『尖石』 茅野町教育委員会 1957年
- 宮坂 英弼 『尖石』<解説付新装版> 学生社 1998年
- 宮坂 英弼 『土器先生の考古学手記』 茅野市教育委員会 2006年
- 宮坂 光昭 「縄文中期勝坂と加曾利 E 期の差」『古代』第44号 1965年
- 宮下 健司 「宮崎遺跡」『長野県史考古資料全一卷(二)』P175～179 1982年
- 村越 潔 「縄文時代の織布について若干の考察」『日本史の黎明』 六興出版 1985年
- 望月 明彦・工藤 大輔 「蛍光 X 線分析による縄文時代石器製作址出土の黒曜石製石器の産地推定—神奈川県清川村宮ヶ瀬遺跡群久保ノ坂(No.4)遺跡—」『宮ヶ瀬遺跡群 XVI 久保ノ坂(No.4)遺跡』 1998年
- 百瀬 新治 「長野市安庭遺跡出土の両耳土器」『長野県考古学会誌』21、P43～44 1975年
- 矢島 國雄他 『上土棚南遺跡-第5次～第7次調査の記録』 綾瀬市教育委員会 2008年
- 安田 善憲 『気候が文明を変える』 岩波書店 1995年
- 安田 善憲 『縄文文明の環境』 吉川弘文館 1997年
- 安田 善憲 『環境考古学事始』 洋泉社 2007年
- 八幡 一郎 「最近発見された貝輸入蓋付土器」『人類学雑誌』43巻8号 1928年
- 山田 武文 「岡谷市志平遺跡の黒曜石埋納土器」 岡谷市教育委員会 2009年
- 山田 昌久 「縄文人の村づくり」『日本人はるかな旅 3—海が育てた森の王国』

- 日本放送出版協会 2001年
山梨県立考古博物館 特別展図録『埋められた財宝』 2008年
横浜市歴史博物館 特別展図録『縄文文化円熟』 2008年
渡辺 誠 「埋甕考」『信濃』第20巻4号、1968年
渡辺 誠 「埋甕研究の背景」『長野県考古学会誌』35号、P7～18 1980年
渡辺 誠 「編布の研究」『日本史の黎明』 六興出版 1985年
渡辺 誠 「新潟県胎内氏江添遺跡出土アスファルト塊の検討ーアンギン圧痕を中心にー」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』平成17年度 新潟県埋蔵文化財調査事業団 2005年
若狭歴史民俗資料館 『鳥浜貝塚 6』 福井県教育委員会 1987年
藁科 哲男 「二戸市大向上平遺跡出土の硬玉製大珠について」『大向上平遺跡発掘調査報告書』 2000年
藁科 哲男 「宮ヶ瀬遺跡群北原 (No.9) 遺跡出土の黒曜石製遺物の石材産地分析」『宮ヶ瀬遺跡群 IV 北原 (No.9) 遺跡 (2)』 1994年

● A表 (加工品)

遺跡名 年代 報告年 (又は発掘年)	福島県喜多方市 博毛 (ばっけ) 遺跡 縄文中期後葉 1985年	岩手県九戸村 田代 IV 遺跡 縄文中期後葉 1995年
出土状況 ピットの有無など	径 23cm のピット内 土器蓋の上に拳大の礫 口縁部一部欠損	構築時には倒立埋設。 深さ 20~25cm、開口部径 130x95cm の楕円形土坑の中、 口縁部が倒立し、頸部付近か ら折れた横倒し状態で出土。 埋設目的の掘り込みは確認で きず
土器形式 大きさ	大木 8 b 式 小型深鉢 器高 12.85cm 胴部径 10.2cm 底径 6.8cm	大木 9 式 器高 75cm、 口径 37cm 胴部最大径 46cm 底径 16cm
内容物 材質	小形石斧 4 点とフレーク 1 点 蛇灰岩製 3 点 流紋岩製 1 点 濃青緑色の石製 1 点	垂飾品 2 点 ヒスイに似た緑色の 緑色凝灰岩製 1 つは 3.8x2.0x1.2cm 重さ 13.49g 他方は 2.9x2.0x0.9cm 重さ 8.88g
図 (又は写真)		

埋納土器についての考察

<p>埼玉県小鹿野町 塚越向山遺跡 縄文中期末葉 1995年</p>	<p>山梨県富士吉田市 上中丸遺跡 縄文中期末葉 (2007年)</p>	<p>東京都府中市 武蔵台遺跡 縄文中期末葉 1996年</p>
<p>敷石住居跡石囲い炉 石斧は小さい順に収められ、粘質土を詰めて固定されていた。その上に黒曜石塊が置かれ、周囲にチャートなどの破片を配する</p>	<p>試掘坑断面。 径 20cm の土坑内。 直上に全長 40cm の扁平な石（ヒン岩）を確認</p>	<p>住居址から 250m 離れた水場の谷最奥部で単独出土 口縁部一部欠損、上下の球胴部に左右対称に把手がつく。 小型土器が蓋のように被さった状態で出土</p>
<p>加曾利 E-4 式 注口土器 器高約 18.2cm 口径約 24.2cm 底径 6.8cm</p>	<p>加曾利 E-4 式 注口浅鉢土器 使用時の被熱痕が顕著 器高 10.09cm 最大径 17.7cm 底径 5.5cm</p>	<p>加曾利 E-4 式 瓢箪型注口土器 文様は全て微隆文 器高 27.0cm 口径 7.0~8.0cm 上半球胴部最大径 14.0cm 下半球胴部最大径 18.5cm 底径 6.0cm</p>
<p>定角式磨製石斧 10 点 緑色岩製 黒曜石塊 3 点 黒曜石剥片等 17 点 使用痕なし 石斧総重量 1233g 黒曜石総重量 1026g 合計 2259g</p>	<p>定角式磨製石斧 8 点 砂岩源ホルンフェルス製 1 点 凝灰岩製 2 点（他は未確認） 黒曜石原石 1 点 420g 石斧は最小 5.7cm ~ 最長 12.4cm で総重量は 594g。 石斧と黒曜石の合計重量は 1014g となった</p>	<p>定角式磨製石斧 6 点 7.5、7.7cm の物 2 点（緑泥片岩製） 12.0、12.3cm の物 2 点（結晶片岩類） 13.7、15.5cm の物 2 点（硬質砂岩類） 総てに使用痕あり 総重量 1517.5g</p>
	 <p>図版提供：富士吉田市</p>	

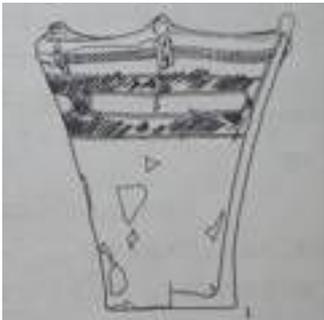
埋納土器についての考察

<p>福島県福島市 宇輪台遺跡 縄文中期末葉 1993年</p>	<p>東京都武蔵野市 御殿山遺跡 縄文後期初頭 1965年</p>	<p>長野県下伊那郡 瑠璃寺前遺跡 縄文後期初頭 1972年</p>
<p>36号住居址 複式炉の長軸上に位置した柱 穴付近から、注口土器に石斧 が接した形で出土 伴出土器に、丸窓を6ヶ所設 けた完形の器台など</p>	<p>第一号住居址 口縁部を床面に接しほぼ直立 の状態に埋めてあった 土器に接して 33x27、厚さ 8cm の扁平な自然石が、あた かも蓋のように置かれていた</p>	<p>3号住居址内 床面下 25cm に埋設 口縁部を 8cm ほど出して埋 め、中に石棒を直立させてい た。胴部大きく破損。内部は 黒土が詰められ、横刃形土器 が入っていた</p>
<p>大木 10 式 胴下半に最大径を持つ注口土 器。側面に 2 ヶ所紐掛け状の 突起がつく。 器高 25.5cm 口径 11.6cm 最大胴径 16.8cm 底径 7.5cm</p>	<p>称名寺式 完形の深鉢形土器 器高 40.8cm 口径 31.5cm 底径 9.0cm</p>	<p>称名寺式 波状口縁の深鉢形土器。 器高 31.0cm、 口径 26.0cm、 底径 10.0cm</p>
<p>磨製石斧 1 点 安山岩製 長さ 10.5cm 幅 4.3cm 厚さ 2.1cm 重量 160.0g</p>	<p>打製石斧 2 点 磨製石斧片 1 点</p>	<p>安山岩製の石棒 正面は火に当たったらしく剥 落が著しい 頭部径 12cm 底部径 14cm 高さ 39cm</p>
		

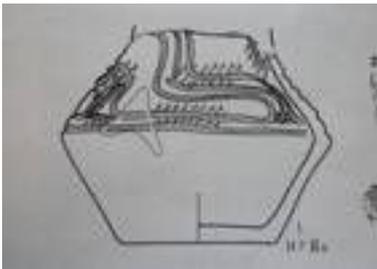
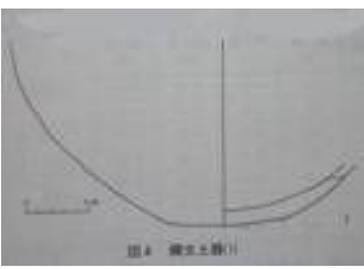
埋納土器についての考察

<p>東京都八王子市 桜塚遺跡 縄文後期前葉 1955年</p>	<p>千葉県船橋市 古作貝塚 縄文後期 1982年</p>	<p>神奈川県綾瀬市 上土棚南遺跡 縄文後期 2008年</p>
<p>丘陵上の東南斜面の畑で、偶然発見される。 遺構が伴わない単独出土。 正式な発掘でないため詳細は不明</p>	<p>1928年、貝層下の焼土付近から土中保管で2点出土 両者の間隔は1.5m。 2個の環状把手を有する蓋付き壺型の無文土器</p>	<p>住居址群の外側 正位で埋設 径20m以内に他4点の埋設土器あり 口縁部一部欠損</p>
<p>堀之内1式 加曾利E-2式が伴出 両耳付注口土器 器高14.5cm 胴部径19.0cm 底径6.0cm</p>	<p>堀之内1式 1号：高さ17.0cm 口径約9.8cm 底径約7.6cm 2号：高さ16.5cm 口径約7.6cm 底径約4.9cm</p>	<p>堀之内2式 朝顔型深鉢形土器 残存高約14.0cm 残存口径14.0cm 底径約10.0cm</p>
<p>磨製石斧4点 蛇灰岩製3点、 碧玉製1点 破損なし。「使用に適さない軟質の蛇灰岩製」「宝物的な扱いを受けたのではないか」</p>	<p>1号：貝輪32点 ベンケイガイ21点 ツタノバ9点 サルボウ3点 2号：貝輪19点 サルボウ18点 ベンケイガイ1点</p>	<p>磨製石斧7点</p>
		

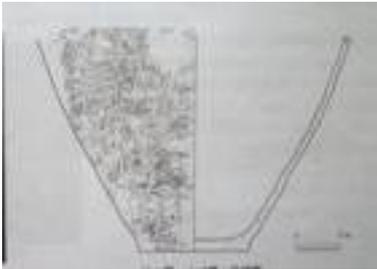
埋納土器についての考察

<p>神奈川県宮が瀬 久保ノ坂 (No.4) 遺跡 縄文後期 1998 年</p>	<p>埼玉県川口市 石神貝塚 縄文後期 1975 年</p>	<p>岩手県二戸市 大向上平遺跡 縄文後期初頭 2000 年</p>
<p>正位で埋設。掘り込みの確認はできなかった 近くに遺構なし 口縁部一部欠損は後世に因ると考えられ、本来は完形で埋設と推定される</p>	<p>第 1 号住居址 床面に焼土と炭化材の散布が見られ、住居が火災にあい遺物の持ち出しを困難にした形跡あり 他に石皿などの出土あり</p>	<p>23x24cm、深さ 14cm のピットに正位で埋設 硬玉製大珠や貝製品の上位かあ、深鉢土器破片 3 点が蓋をするように置かれていた 土器底部・同部下半が欠損。 住居址に伴う形跡はない</p>
<p>堀之内 2 式 波状口縁を持つ朝顔形の深鉢。波頂部に対応して 8 の字状の貼り付け文あり 器高 20.0cm、 口径 17.0cm、 底径 9.0cm</p>	<p>堀之内 2 式 無文の深鉢形土器 器高 25.0cm 口径 22.5cm 底径 16.2cm</p>	<p>十腰内 1 式 器高 13.40cm、 口径 10.0cm、 底径 6.7cm</p>
<p>定角式磨製石斧 1 点 硬質中粒凝灰岩 基端部を下に、刃部を上 土器に立てかけるような状態で出土 長さ 8.3cm、幅 4.9cm、 厚さ 2.1cm 重量 161.9g</p>	<p>磨製石斧石斧 2 点 硬玉製と蛇紋岩製 破損品だが美品 使用されたかどうか不明 残存長 基端部残存品は約 10.0cm 刃部残存品は約 6.7cm</p>	<p>硬玉製大珠 2 点 1 つは 4.3x2.9x1.7cm 重さ 36.2g 他方は 5.0x2.6x1.4cm 重さ 30.7g 貝製品 3 点 貝製小玉 73 点 (アマオブネ貝)</p>
		

埋納土器についての考察

<p>青森県八戸市 笹子遺跡 縄文後期前葉 1988年</p>	<p>群馬県吉井町腰巻 遺跡名なし 縄文晩期 1983年</p>	<p>長野県長野市 宮崎遺跡 縄文晩期 1982年</p>
<p>ピットの有無は不明 口縁部から頸部にかけて破損している 土器に伴う遺構は検出されなかった</p>	<p>造成工事中、重機のシャベルにより掻き出され持ち込まれる。土器底部の土に、石斧の圧着痕が認められた。 周辺に住居址などは確認できなかった</p>	<p>1948年、敷石住居址様の遺構の、1m四方の敷石の下から出土。 付近に小型磨製石斧1点と耳栓が置かれていた。詳細な報告書はない。</p>
<p>十腰内1式 壺形土器 胴中央部が「く」の字状に張り出し、算盤玉の形状を呈す 残存高 8.2cm、 最大胴径 10.2cm 底径 6.0cm</p>	<p>鉢形土器 (安行式か?) 最大径 35cm 以上</p>	<p>安行 3a 式 縄文施文の 鉢形土器</p>
<p>定角式磨製石斧 3点 総て緑色凝灰岩製 1つは、器長 5.9cm 重量 14.8g で擦痕 2つ目は器長 7.6cm 重量 75g で小剥離痕 3つ目は器長 8.4cm 重量 85g で小剥離痕</p>	<p>磨製石斧 7点 貴蛇紋岩製 4点 変斑糲岩製 2点 閃緑岩製 1点 若干の刃こぼれを有する物もあるが、石斧としての機能は保持していた 縄文時代晩期の石斧セットと考えられている</p>	<p>定角式磨製石斧 4点 蛇紋岩製 刃部を上に向けて収納されていた。 使用痕は全くない</p>
		

埋納土器についての考察

<p>新潟県津南町 正面ヶ原 A 遺跡 縄文晩期 1999 年</p>	<p>秋田県秋田市 秋大農場南遺跡 縄文晩期 1992 年</p>
<p>広場の東側縁に埋設 丸礫 14 点の下に 磨製石斧 2 点が埋納されてい た</p>	<p>調査区の西側で検出 6 号埋設土器</p>
<p>佐野式 鉢形土器 残存高 25.2cm 底径 12.8cm</p>	<p>大洞 C2 式の 深鉢形土器 残存高 14cm、 現存最大径 18cm 底径 6.6cm</p>
<p>磨製石斧 2 点 蛇紋岩製の優品 丸礫 14 点</p>	<p>定角式磨製石斧 10 点 小型のもの 6 点、 長さ 4.3~5.7cm 大き目の物 4 点 長さ 13.8~16.9cm</p>
	

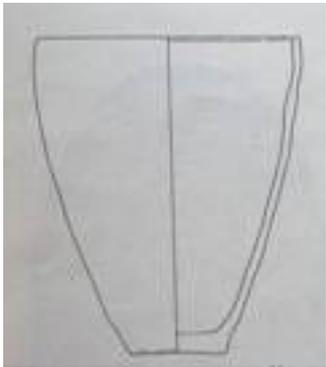
● B表（原材料が入れられた出土例）

遺跡名 時代 報告年 (又は発掘年)	長野県長野市 安庭遺跡 縄文中期末葉 1975年	埼玉県小鹿野町 塚越向山遺跡 縄文中期末葉 1995年
出土状況 ピットの有無など	農作業中に発見。出土年不明。 土器を囲うように4個の自然石が並び、土器の下に一枚の石を敷き、さらに石の蓋が被せてあった。	敷石住居跡石囲い炉 石斧は小さい順に収められ、粘質土を詰めて固定されていた。その上に黒曜石塊が置かれ、周囲にチャートなどの破片を配する
土器形式 大きさ	曾利5式 両耳付甕形土器 器高 33.5cm 口径 23cm 底径 12.0cm	加曾利E-4式 注口土器 器高約 18.2cm 口径約 24.2cm 底径 6.8cm
内容物 材質	チャート剥片が 200点 黒曜石片が 2, 3点	磨製石斧 10点 黒曜石塊 3点 黒曜石剥片等 17点 使用痕なし 石斧総重量 1233g 黒曜石総重量 1026g 合計 2259g
図 (又は写真)		

埋納土器についての考察

<p>山梨県富士吉田市 上中丸遺跡 縄文中期末葉 (2007年)</p>	<p>山梨県秋山村 小和田原遺跡 縄文中期末葉 1993年</p>	<p>山梨県都留市 尾咲原遺跡 縄文中期末葉 1993年</p>
<p>試掘坑断面。 径 20cm の土坑内。 直上に全長 40cm の扁平な 石（ヒン岩）を確認</p>	<p>畑開墾中、石囲い炉と共に発 見された。発掘年不明 破片は口縁部から底部までほ ぼ揃っており、欠損している が、口唇部直下に把手がつく。</p>	<p>1983年、屋外の配石中に、埋 設された状態で出土した。 口縁部欠損</p>
<p>加曾利 E-4 式 注口浅鉢土器 使用時の被熱痕が顕著 器高 10.09cm 最大径 17.7cm 底径 5.5cm</p>	<p>加曾利 E-4 式 鉢形土器 器高約 27.52cm 口径約 22.02cm 底径 7.0m</p>	<p>加曾利 E-4 式 棒状施文具による区画文と、 充填手法による縄文が施文さ れている。 残存高 12.1cm 底径 5.6cm</p>
<p>定角式磨製石斧 8 点 黒曜石原石 1 点 420g 石斧は最小 5.7cm ～ 最長 12.4cm で総重量は 594g。 石斧と黒曜石の合計重量は 1014g となった</p>	<p>黒曜石 60 点 最大 80g、最小 7g 総重量 2163g</p>	<p>黒曜石 7 点 内 2 点は石核 最大 69g、最小 10g 総重量 219g</p>
 <p>図版提供：富士吉田市</p>		

埋納土器についての考察

<p>長野県長野市 宮崎遺跡 縄文中期末～ 1988年</p>	<p>長野県岡谷市 志平遺跡 縄文中期～後期 (2008年)</p>	<p>神奈川県宮が瀬 北原 (No.9) 遺跡 縄文後期 1994年</p>
<p>1985年発掘 1号敷石住居址 敷石を蓋にして埋め込まれ、 その下には別の土器底部あり。</p>	<p>地下30cmから出土 腹部上より欠損、横腹大きく 欠損。 浅い場所に埋められていたの で、耕作による可能性あり。</p>	<p>J1号埋設土器 正位の状態で埋設。 段切り面のため土器の大半を 失っている</p>
<p>加曾利 E-4 式 口縁部が一部残る無文の深 鉢土器 煮炊きに用いられた痕跡が 認められる 器高 33.4cm、 口径 28.2cm、 底径 9.2cm</p>	<p>縄文中期後葉 深鉢式土器</p>	<p>堀之内 1 式 口縁部に大型突起 括れた頸部には 8 の字 状貼り付け文を伴う 2 本の沈 線が巡る。 器高約 28.6cm 胴部径約 13.8cm 底径 6.6cm</p>
<p>黒曜石 10 点 最大 200g、自然面を残した ままのものが多く。 底に多量の碎片が堆積、石器 製作との関連が予想される。</p>	<p>黒曜石原石 13 点 最大 42.5g 総重量 250g 両面に加工痕のあるものもあ る</p>	<p>黒曜石原石 9 点 残核 8 点の計 17 点 原石重量 286.6g 残核重量 275.7g 総重量 581.1g 全てが霧が峰産</p>
	 <p>写真提供：岡谷市</p>	

埋納土器についての考察

秋田県仙北町

潟前遺跡

縄文後期前葉

2000年

1998年、SR262土坑より出土

開口部径 28cm、底面径 16cm、深さ 18cm の掘り込みあり。

正位埋設

後期前葉

上部を欠損する深鉢形土器

現存高 18cm

口径 16cm

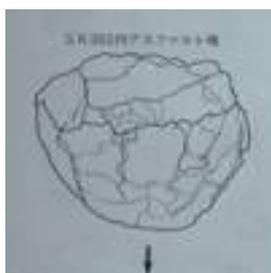
底径 9cm

アスファルト

重量 2,490g

土器と合わせた

総重量は 3,580g



● C表 (縄文土器編年表)

	東北	関東甲信越	A グループ遺跡名	B グループ遺跡名
人口最大期		(井戸尻)		
中期	大木 8a	加曾利 E-1	博毛遺跡 (※)	
	大木 8b	加曾利 E-2		
	大木 9	加曾利 E-3	田代 IV 遺跡 (:) (#)	安庭遺跡 (:)
およそ 4000 年前		加曾利 E-4	塚越向山遺跡 (#)	塚越向山遺跡 (#)
			上中丸遺跡 (※)	上中丸遺跡 (※)
	大木 10		武蔵台遺跡 (:)	小和田原遺跡 (#)
寒冷化始まり 東日本の人口 減少に転じる	(蛭沢)	称名寺	御殿山遺跡 (※) (#)	
	十腰内 1	堀之内 1,2	瑠璃寺前遺跡 (*) (#)	北原 (No.9) 遺跡 (*)
			桜塚遺跡	
後期			古作貝塚 (:)	
			上土棚南遺跡 (*)	
			久保ノ坂 (No.4) 遺跡 (*)	
およそ 3000 年前			石神貝塚 (#)	
			大向上平遺跡 (※)	
			笹子遺跡	潟前遺跡 (*)
人口激減期	大洞 B	安行 2,3	吉井町腰巻	
晩期	大洞 B-C	安行 3	宮崎遺跡 (※) (#)	
		(佐野)	正面ヶ原 A 遺跡 (*)	
	大洞 C1-2		秋代農場南遺跡 (*)	
	大洞 A,A'			

(*) ピットあり

(:) 蓋あり

(※) ピットと蓋あり

(#) 住居址

● D表 (石斧サイズと総重量)

遺跡名・年代 土器の形状 (石斧数・総重量)	大きさ・重量	材質他
博毛遺跡 縄文中期 小形深鉢土器 (5点・?)	2.56cm、3.40cm、4.11cm、4.15cm 5.55cm	蛇紋岩 3点 流紋岩 1点 濃青緑色石 1点 (正式名称不明)
塚越向山遺跡 縄文中期 把手付注口土器 (10点・1233g)	6.5cm-68g (基部折損品) 7.0cm-56g、6.8cm-57g、7.4cm-66g、 7.4cm-76g、8.0cm-82g、8.2cm-99g、 9.9cm-142g、11.8cm-325g、12.0cm-262g	緑色岩
上中丸遺跡 縄文中期 注口浅鉢土器 (8点・594g)	5.7cm-17g、7.7cm-83g、7.7cm-92g、 9.2cm-111g、9.7cm-137g、10.2cm-168g、 11.0cm-260g、12.4cm-41g (幅 1.4cm)	凝灰岩製 2点、砂 岩源ホルンフェル ス製 1点、 他未確認
武蔵台遺跡 縄文中期 瓢箪型注口土器 (6点・1517g)	7.5cm-70.5g、7.7cm-78.0g、 12.0cm-254.5g、12.3cm-285.5、 13.7cm-370.0g、15.5cm-459.0g	緑泥片岩 2点、 結晶片岩類 2点、 硬質砂岩類 2点
宇輪台遺跡 縄文中期 把手付注口深鉢土器 (1点・160g)	10.5cm-160.0g	安山岩
上土棚南遺跡 縄文後期 朝顔形深鉢土器 (7点・?)	2.6cm、5.4cm、6.0cm、7.4cm、8.6cm 10.4cm、11.0cm	材質・重量共に不 明
久保ノ坂 (No.4) 遺跡 縄文後期 朝顔形深鉢土器 (1点・161.9g)	8.3cm-161.9g	硬質中粒凝灰岩製
笹子遺跡 縄文後期 壺形土器 (3点・184.8g)	5.9cm-14.8g、7.6cm-75.0g、8.4cm-95.0g	緑色凝灰岩製

埋納土器についての考察

吉井町腰巻 縄文晩期 鉢形土器 (7点・2497g)	7.43cm-34g、9.26cm-162g、 10.10cm-118g、12.96cm-252g、 18.00cm-982g、19.30cm-914g	貴蛇紋岩 4点、 変班糲岩 2点、 閃緑岩製 1点
秋大農場南遺跡 縄文晩期 深鉢形土器 (10点・?)	4.1cm、4.3cm、4.3cm、4.7cm、5.5cm、5.9cm 13.8cm、14.7cm、15.7cm、16.9cm、	材質未確認 重量不明

写真版



1、楼閣が描かれた絵画土器（唐子・鍵遺跡ミュージアム蔵）



2、復元された楼閣



3、褐鉄鉞容器とヒスイ勾玉



4、埋甕出土例：北杜市上神取諏訪原遺跡（明野町埋蔵文化財センター）



5、八ヶ岳西南麓に広がる、尖石遺跡と与助尾根遺跡
(道路を挟んで向かって右が尖石遺跡、左が与助尾根遺跡)



6、屋根材交換作業中の、与助尾根復元住居



7、古作貝塚出土の貝輪（国立博物館蔵）



8、塚越向山遺跡、出土状況（写真提供：小鹿野町教育委員会）



9、塚越向山遺跡、注口土器と収納品（写真提供：小鹿野町教育委員会）



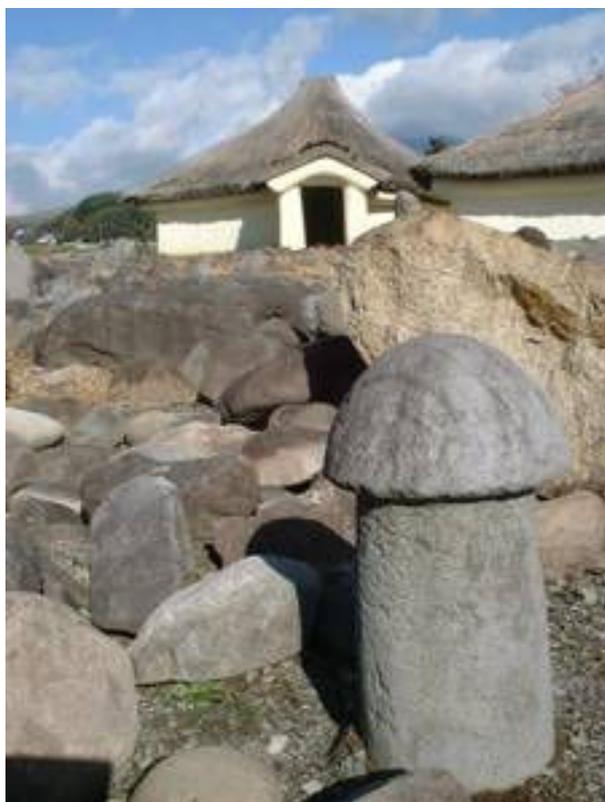
10、上中丸遺跡出土の石斧収納注口土器（写真提供：富士吉田市教育委員会）



11、縄文時代のピアス、耳栓あれこれ（井戸尻考古館蔵）



12、志平遺跡出土の黒曜石収納土器（写真提供：岡谷市教育委員会）



13、縄文時代の祭祀集落、金生遺跡に立つ石棒：山梨県北杜市



14、大向上平遺跡、ヒスイ大珠収納の土器（岩手県埋蔵文化財センター蔵）



15、1956年に天然記念物に指定された、小滝川ひすい峡



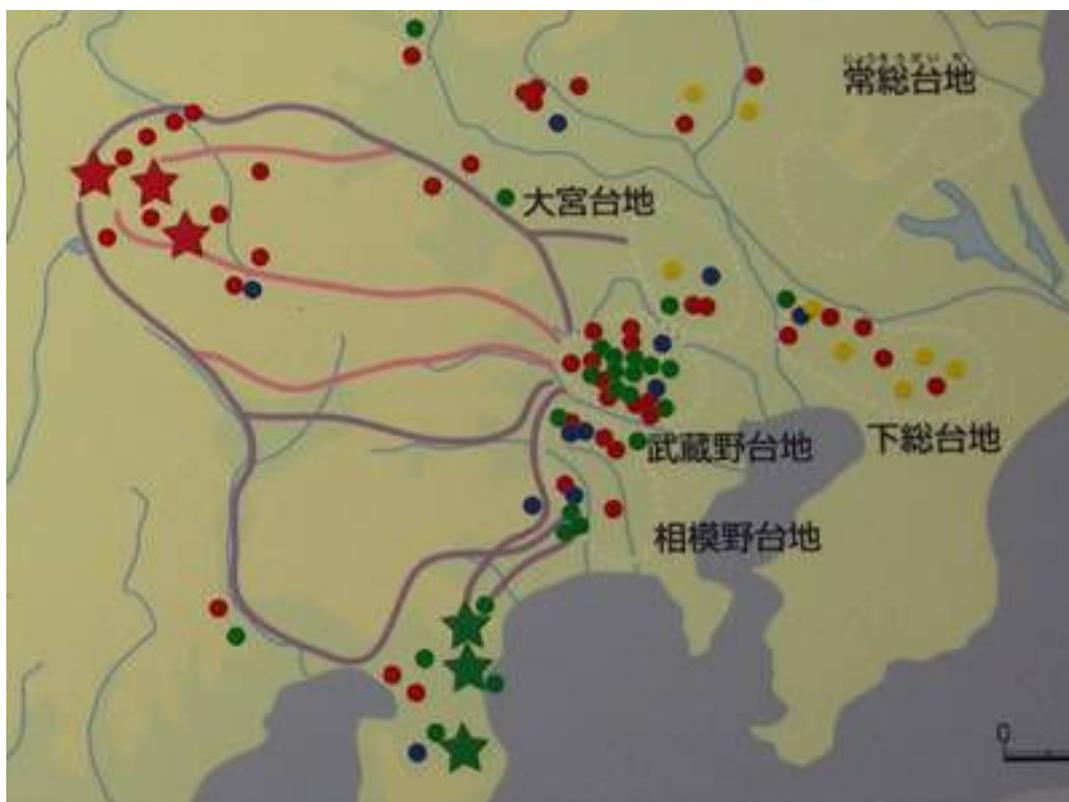
16、上はヒスイ大珠、下が田代IV遺跡の垂飾品（岩手県埋蔵文化財センター蔵）



17、磨製石斧利用例（新潟県埋蔵文化財センター蔵）



18、アスファルト入りの土器：大坂上道遺跡（新潟県埋蔵文化財センター蔵）



19、黒耀石交易ルート（黒耀石体験ミュージアム）



20、注口土器あれこれ（新潟県埋蔵文化財センター蔵）



21、赤色顔料の彩色が見られた有穴罎付土器の複製品（尖石縄文考古館蔵）



22、手のひらサイズの切断土器（岩手県埋蔵文化財センター蔵）

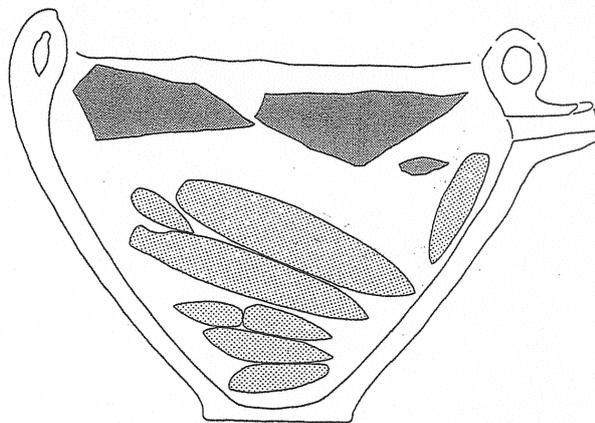


23、アングイン布に包まれていたアスファルト（新潟県埋蔵文化財センター蔵）

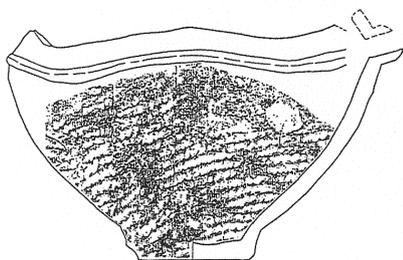
図 1-1 加工品収納土器 (1)



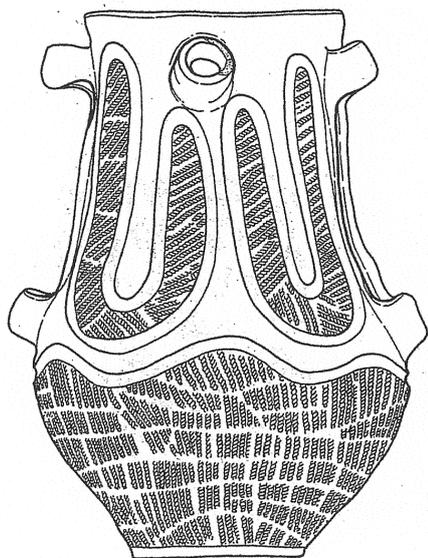
博毛遺跡



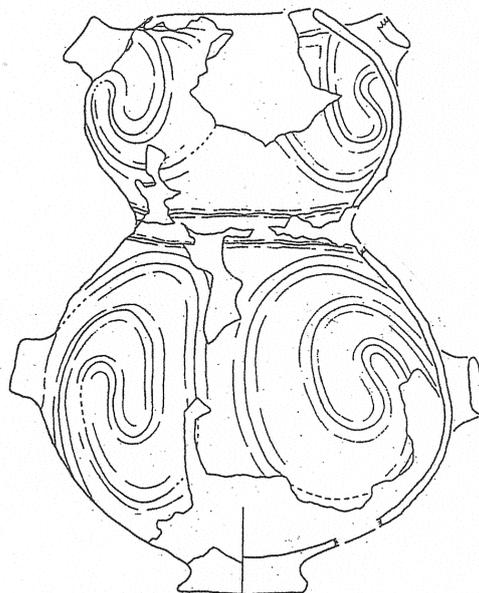
塚越向山遺跡



上中丸遺跡



宇輪台遺跡



武蔵台遺跡

図 1-2 加工品収納土器 (2)



図 1-3 加工品収納土器 (3)

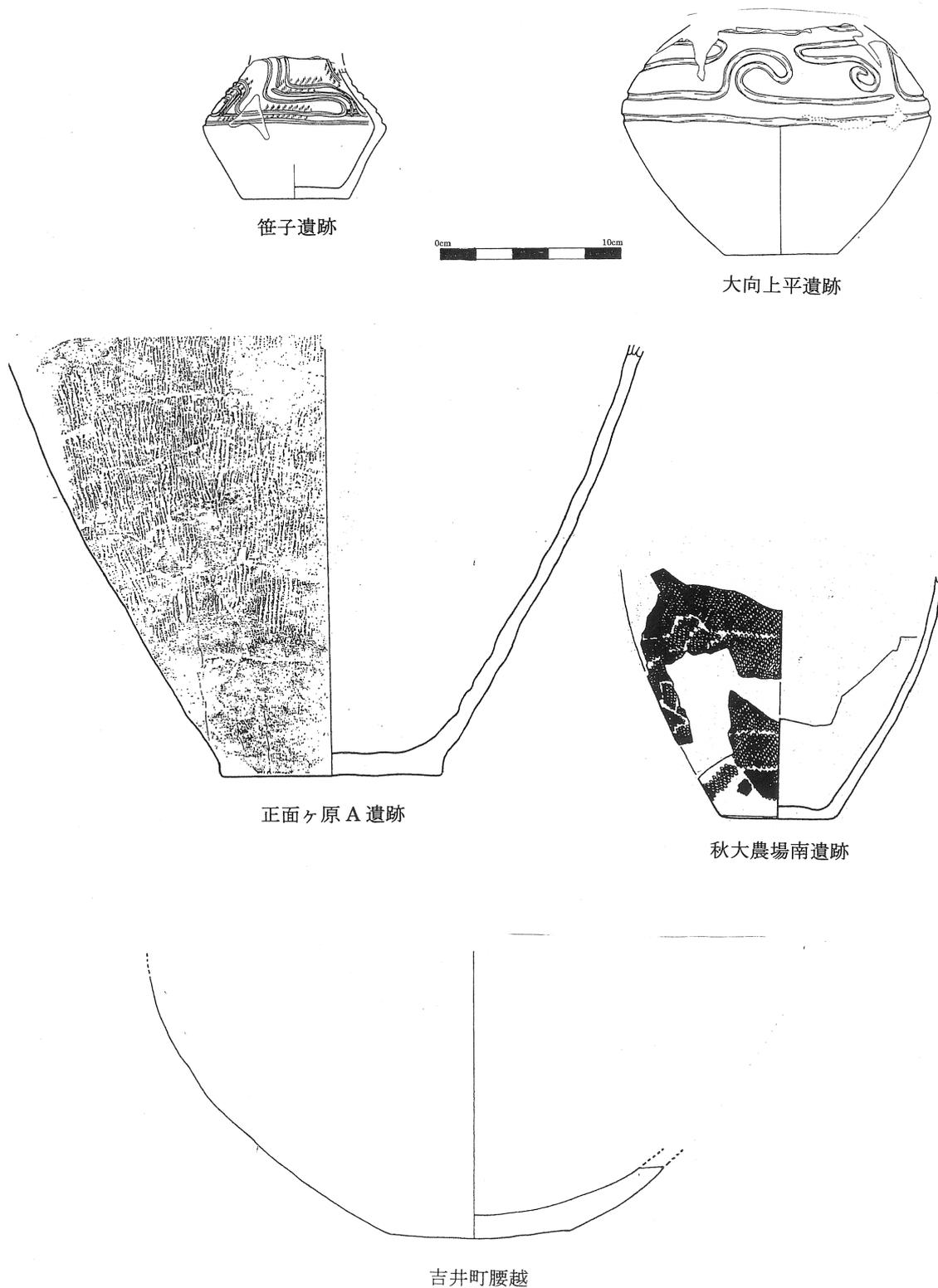


図 2-1 原材料収納土器 (1)

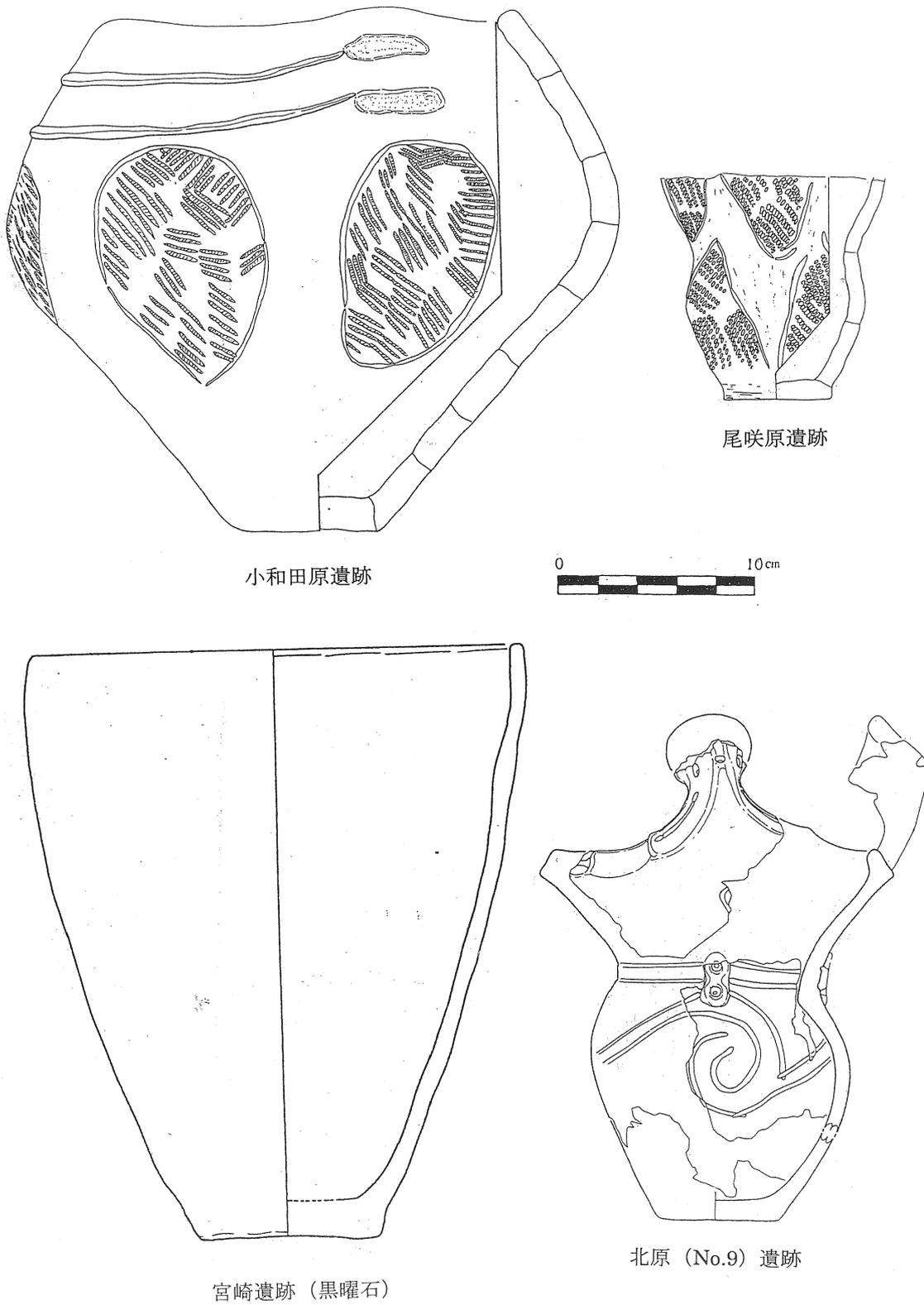


図 2-2 原材料収納土器 (2)

